
[練習作]ダンジョン物

夜霧 時矢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「練習作」ダンジョン物

【Nコード】

N0565W

【作者名】

夜霧 時矢

【あらすじ】

ダンジョン物。

最初はさっぱりダンジョンに潜る描写がない不思議作品。基本的に投稿後に読み直し、誤字脱字の確認をしています。PC閲覧横書き推奨を前提に書いています。

一話五千文字ぐらいを予定していたはずなんだが一話一万文字になっている件。

最早駄目作者として絶望的である。

「現在物語全体の改装作業中です。」

なお、似ている作品があったら感想欄で教えて下さい、参考にします。」
(^o^o^)

プロローグ 思いでポロポロ（前書き）

書き直して、過去編から始めたもののもう別物みたいになってしまった。

とりあえず、もう少しゆっくり進める事にする。

続ける事よりも完結を目指す事にした。

とりあえず物語が追い付き次第旧ダンジョン物は消します。

ブローグ 思いでポロポロ

家を飛び出してから二十年がたった。

当初、見た目はカツコイイより可愛い系でこれはモテる！ と思っただけは悪くない。

それでも男女交際的な意味で魔法使いなのです。なにせ見た目はまだ小学生みたいなものである。

事実小学生みたいなもので未だ性欲は存在しない。

さて、いきなりこんな話をされてもよくわからないと思う。

だから、少しだけこれまでの話をしよう。

（生前、前世と言えるその話）

うちはどこにでもいる、むしろどこを探せば見つかるの？ 的なモブの一般人だった。

そう、大多数の中の一人であり特別優れているわけじゃないし大抵劣っているとみられる部類だ。

文章、漫画、映像等の娯楽が好きでオタクと言うほど知識もなくてただ楽しむ程度の人間だ。

人付き合いに関しては引きこもりと同レベルで苦手であるが、家が裕福なわけじゃないので最低限周囲とのかかわりを持っていた。

そんなこんなでな流されて生きて、社会に出て世間の冷たさに絶望したころうちは死んだ。

別に、よくある神様がうんぬんとか邪神やら悪魔やらがうんぬんで殺されましたというわけではない。

単純に交通事故だった。

相手は居眠り運転だったのだろう、ハンドル操作を間違えたのか歩道に突っ込んできたのだ。

残念な事にそこは電信柱やらガードレールやら障害物になるようなものではなく減速もなかった。

そして跳ねられてすぐ、うちは死んだんだと思う。
なにせそこで記憶が終わっているから。

〈生まれてからの話〉

生まれた直後は周囲が大変喜んでいたので覚えている。

気づいたら生まれていたのでこれが転生というやつなのだと思う。
なぜ生前の記憶を持ったまま生まれたのかわからないが、あまりの痛みに暴れたのを覚えている。

周囲の人たちは大変喜んでかなり大きな声で騒いでいたんだと思う。

言語が違ったので言っている事はさっぱり理解できなかったが。
暫くは耳が発達するのに時間がかかるらしく音が良く聞こえずくぐもって聞こえた。

それでもなんだかんだで大事にされているのがわかった。

ただ、意識がなぜかはつきりしないのはどうかしてほしいと思う、赤ちゃん特有のものだろうからあきらめたが。

後々になって分かった事だが、子供が生まれにくく、生まれても大抵死産という種族の子供だったのだ。

たぶん、喜んでいたのはそのせいだろう。

〈幼少期の話〉

元々いた世界と違って純粋な人間以外の人類がいる世界らしい。
どうやら転生は世界も超えるようだ。

うちの種族は長命種と呼ばれるものすごく長生きの種族らしい。

まあ出生率が悪いのはそのせいだな、増えすぎないようにする自然の摂理だ。

そしてこの世界には魔法がありモンスターがいて文明が機械文明まで到達していない程度だ。

まあ魔法が無駄に便利なので元の世界みたいに狂った速度で発達するわけではないよなと思う。

もちろん魔法を覚えました。

元々科学的な知識を小学校から高校までで教える義務教育を受けていてよかったと初めて思った。

パソコンもそれなりに障っていたのでシステムの概念もそれなりに理解できる。

そしてそれらに似ているのだ、魔法の雰囲気というか使い方というか構成というか。

そんなわけで村では神童として扱われた。

ああそうそう、成長が早いのは大体人間換算で七歳あたりまで、そこからゆっくり成長するらしい。

つまり、七歳までは人間と同じように成長するのだ。

そして七歳を迎えるころには村八分になっていた。

なぜに？

〈疎まれていたころの話〉

両親に新たな子供ができたのは喜ばしい話だ。

前世のうる覚えな性教育知識をフル活用して“当たりの日”にするよう誘導したのが良かったらしい。

いやあ、この種族月のものが半年に一度しかないってすごいなと思っただ。

これで子供なんてできるわけねーべ。

そんなわけで、得意な回復魔法を出産前からかけ続け元気な妹が

生まれましたとき。

嗚呼、妹可愛いよ妹。

べったべたの超世話焼きでお兄ちゃん大好きっ子が育ったが、両親が矯正してしまった。

うぬれ両親、いつかいてこましたる。

そのころ神童と呼ばれていた自分は元のひきこもりの性格から妹と一緒にいる事が多く、少々孤立していた。

両親からも少し距離を置かれ始めたのも妹ができてからだだったと思う。

そのころなんか両親から妹と距離を置かされ始めたのに気づけば何か変わったかもしれないが後の祭りである。

なぜそんな事が起こったのか？ それは異世界の知識は異世界の常識という異端をうちにもたらしたからである。

結果的に忌み子として見られていたと、村を出る時に村長に教えてもらわなければなぜ避けられていたのかわからなかったほどだ。

うちの行動は結果的には利益をもたらしたが行動が異様であり変であり教えてもない事を知っており普通は知っているはずの事を知らなかった。

結果、暗黙の了解を破りまくり種族的なうんぬんを無視した拳句誇りがどうのこうのと、正直教えてくれたのはうれしいが村長うざい、最後だからって恨み言言わんで下さい。

（村から出てからの話）

初めてモンスターに遭遇した、無論死にかけた。

子供が生きていけるほど旅は甘くないのだ。

もちろん世の中も甘くないわけで、人とすれ違ってても特に優しくしてくれるわけではないのである。

学んだことは優しい言葉には裏がある。

元の平和な世界ではどうだったか知らないが、この世界では無意味にやさしいやつらは危険であると学んだ。

三回ぐらい身ぐるみはがされた。

運良く生き残ったが、それから同じような事が何十回と有った。

だが村には帰れない、追放されたようなものだったので帰っても追い出されるだろう。

なにせ、子供の作り方を教えてしまったのだ。

今更忌み子を村に置く理由がなかった。

そしてうちは死ぬ気で強くなったわけで、最弱のモンスターであるゼリーっぽいのをどうにか殺せるようになった。

そして初めてのレベルアップを経験した。

どうやらこの世界、ゲームのようなシステムが存在するらしい。

たとえばここがゲームみたいな世界でも、モンスターを倒してもお金を稼ぐことはできない、一つ賢くなった。

やっぱりお金持つてるわけないよね、モンスターが。

（世界を知ってからの話）

あれから一人で世界を放浪している。

うちの故郷はかなり辺境の森の中だったらしく必死に歩いてても町一つ遭遇しない。

さすがに村はいくつか遭遇したが、基本的に小さな社会は外からの人間を受け入れないので特に日記に書くようなことはなかった。道はあるにはあるがたぶん旅人や行商人が使うためのものなのだろう。

自分が生きているのはモンスターが殺しても消えてしまわないので食べる事が出来たからだ。

最初の頃は悲惨だったなあ。

必死に葉っぱかじったり根っこかじったり食べれそうな死体を肉

食の小動物と取り合ったり。

少なくとも人間のするような生活ではなかった。

最弱モンスターのゼリーは糞不味かつた事をここに記しておく。

今ではモンスターを倒して素材と呼ばれる生活に使える部分を剥ぎ取りそれを売る事で生活している。

気がつけば村を飛び出して十年がたっていた。

未だ小学生にしか見えないため信用してもらえず町では雇ってもらえなかった。

まあ冒険者モドキしてるからいいんだが。

そして町で新たな情報を手に入れた。

モンスターは基本的にダンジョンから逃げ出したもので、ダンジョン内で殺すと素材を残して消えるらしい。

そして、そんなモンスターを狩る連中を冒険者と言い、遺跡と呼ばれるダンジョンからいろいろなアイテムを回収して生活するんだそうだ。

なんと冒険者なら自分のような小さな子供でもなれるらしい。

さすがに死ぬだろ、普通は。

まあそうだよなと大笑いされたが、本気でうちの事をただの子供だと思ってるらしい。

そしてダンジョンだが、この近くには無いという話なのでさらに旅をつづける事にする。

後、ステータスを見る魔法を覚えてもらった。

変な呪いっぽいのがついていて。

長命種の宿命という名前らしい。

たぶん種族的なものなので仕方ないと諦める。

そしてその内容だが次のようなものだ。

・成長速度干涉「低下補正」 どうやら長命種の成長が遅いのはこれのせいらしい。

・特殊技能干涉「成功率低下補正」 ゲームで言うところの職業

についてないからそんなものはもっていない。

- ・生産スキル干涉「成功率低下補正」 上記同様持っていない。
- ・レベルアップ速度干涉「低下補正」 なんか、聞いた感じ人の十倍ぐらい必要なようだ。

- ・レベルアップ時ステータス追加上昇 詳細不明である。

- ・転職制限「基本職の転職不可」 職業訓練生つてのの上にある基本職業に転職できないらしい。

どうやら特殊職業というのは生産職らしく、その道のプロを目指すなら一般人だろうと最低でもこの生産職につくらしい。

そして初心者であり子供な俺は元の世界で言う職業にもつけてないのでリアル無職である。

二ト万歳。

そんなこんなで町についた。

気がつけば誕生から二十年たっていた。

プロローグ 思いでポロポロ（後書き）

プロローグ終了時点での主人公ステータス。
スキルでない自力での物作りは生産スキルには含まれません。
なお、祝福は無条件に詳細閲覧可能。

名称：ファイフィル・ファウ・フォリア 職名：フィー

職業：初心者

称号一覧 「転生者」「家出人」「光化学狂信者」

<< 特殊技能一覧

> 魔法：ステータス閲覧

・Lv・1 名前、職業、称号一覧、本スキル詳細と技能一覧を閲覧可能

・Next-count 150

> 魔法：生命力回復補助

> 魔法：肉体活性化

<< 祝福一覧

> 長命種の宿命

・成長速度干涉「低下補正」

・特殊技能干涉「成功率低下補正」

・生産スキル干涉「成功率低下補正」

・レベルアップ速度干涉「低下補正」

・レベルアップ時ステータス追加上昇

・転職制限「基本職の転職不可」

第一話 思い出す過去（前書き）

会話が一切ない。

ただしこれはわざとである。

次回から会話が入る予定。

プロローグと分けたのはまともに生活しだしてからはまた別だと思
ったから。

加筆修正済み 2011・11・4。

第一話 思い出す過去

世界は優しくない。

世界は犠牲を望んでいる。

世界が、罪に塗れているが故に。

親の罪は子へ、世界の罪はその世界の生命へ引き継がれる。

故に争いは無くならない、不幸は消えず、それでも運命それにあらがう者たちがいる。

その名は冒険者。

自らを犠牲に、世界を導く者たちである。

だがその冒険者すら罪に塗れている。

だが、それでも人々は諦めず前を見つめ歩んで行く。

……というのが冒険者の前提らしい。

つまり「憧れる、しかし信用するな」という事らしい。

冒険者は良いやつもいれば悪いやつもいる、ただし基本的に荒くれが多いという事だ。

元々食うに困って冒険者になる人は結構いるらしい。

そのほとんどは死ぬが、今のうちみたいにそれを乗り越えたやつらはそこそこいいところまで行くそうだ。

そして、今更知った事だがこの世界にはダンジョンと呼ばれる地下迷宮があつて、ゲームの如く色々なものが発掘できるらしい。

そのせいで科学技術や魔法技術が発展しないみたいだが発掘できるものだけで生活しているほど発掘品は便利だという事である。

ますますゲームめいてきた。

うちはゲームの世界に転生したのだろうか？

しかし生前こんなゲームは見た事がない。

システムも聞きかじったダンジョンがどう言うものかと言つのも

生前好きだった不思議のダンジョン系（入るごとに構造が変わる迷宮）ではなかった。

ただし、固定なわけでもないため実際にゲームで言う“再突入”とは時間軸的な流れにあたるもので、実際には知っているゲームの世界なのかもしれない。

それにしても特殊な効果を持つアイテムや傷を治す薬の名前やら一切知っているものがないのが気になる。

気になったわけで調べてみたが、分かった事はいくつかしかない。ネットワークはあるが、一部の王族とギルド系と呼ばれる組織の上級幹部が使う現代で言う電話とファックス、初期のHTML（ネットワーク上で見れる文書）のようなものだった。

まあ、ここにきて世間知らずの箱入り娘ならぬ息子だったことがわかっただけで儲けものだろう。

後、軽々しく名前を教えるはいけないそう。

名前を聞いても嫌な顔をして教えてくれなかったのはそのためらしい。

何やらこの世界、奴隷制度に近い物があるらしく名前を生まれた場所と内容が事実である罪状があれば奴隷モドキとして一定期間こき使えるらしい。

無論警察組織のようなものがあり厄介ごとを起こすやからを王族や貴族、平民に至るまで分け隔てなく神の名の下に取り締まるらしい。

親切に一から十まで教えてもらったがやはりと言ったらいいか、一部自身の持つ常識と照らし合わせて納得できない事柄もあった。

本来、名前を明かすのは結婚相手や家族や上位者（家臣から見た王族等）であり、名前を聞くという事はそういう事だったらしい。

さらに、ステータスを明かすのも厳禁で、無論聞くのはとんでもないマナー違反だ。

追加で言えば、仕事名と職業名をギルドに登録してないと身分証

明を求められた時に厄介な事になるらしい。

通常は親が生まれた時にするらしいのだが、あんな辺境じゃ絶対してないなと自身の証明書を発行してもらった。

なお二回目からは有料で、一回目は国が出してくれるらしい。

このカードがあると公共施設が利用できるようになり、何処何処の誰々というものもギルドカードを提示できればギルド側に問い合わせる事が出来、当事者同士で本名がばれる事がなくなる。

また各国の国境を超える際、非常に面倒な手続きをしなくても提示すれば犯罪歴を参照後に通してもらえろという便利アイテムらしい。

ただし、特定の月に現在在籍している国に対し税金を払いこまなければいけない。

商人ギルドなんかもギルドカードを提示できれば特にチェックもなく買い物ができるとか。

つまり、身分証明書兼首輪なわけである。

親切丁寧にこんな田舎者の子供モドキに教えてくれる自称神官のお姉さんは、仕事だからこんな親切にしてくれるわけではない。

こんなに冒険者ギルドが親切なかだがもちろん裏がある、という事である。

冒険者ギルドは働いてほしいし問題を起こしてほしくない、つまり問題起こしたらぶっ殺して村八分にすんぞゴルアという事を周知徹底しているだけである。

ちなみに神官は女性だけの専用職業であり、男性がなれるのは教主と呼ばれる渡り歩く魔法医者である。

薬ではなく魔法を使って治療するから魔法医者である。

まあそんなわけで、ダンジョンとギルドのある町での生活が始まったわけだ。

「町での生活、始まりは浮浪者」

良く考えたら住むところがない、金もない、食べ物もなければ着る服しかない。

ないない尽くしである。

このままでは浮浪者一直線で、とりあえず宿と仕事の確保が最優先だが……、すでに一週間ほど就職活動をしているが見つからない。寝る場所は町の外で野宿である。

川があるので毎日洗っているが、それでもどうにもならないのはこの見た目だ。

もう十歳ぐらいの子供に見えるわけである。

そりゃだれも雇ってくれないわな。

そして初めて野宿のために町を出た時はモンスター侵入を防ぐための門に阻まれて門番さんに説明するのにかなり時間を取られたっけ。

あー、正気を疑ってたよな子供が野宿のために町を出るとか、親はどうしたとかさんざん聞かれたし。

とりあえず町の外に家でも作るべく、日々就職活動と物資の調達に明け暮れている。

現在、最低限の生活費は襲ってくるモンスターをぶっ殺して素材を売ってどうにかしているが、本当に最低限で食糧とかは自力調達である。

ん？ お金をどこに使ってるんだって？ 無論大工道具と釘とか家（ほったて小屋とも言う）を作るのに必要な物資の調達である。変わった事と言えばこの町に来てから一日一回かならずダンジョンに潜っている事ぐらいだろう。

ダンジョンではモンスターの死体が消えるため食料の確保はできないが、素材を自分で加工する手間がかからないため最低限のお金を確保するためである。

ちなみにそのお金は買った大工道具やら物資をためておくための

倉庫を借りる代金に消えている。

外に置いておくとも使ってもいいという扱いで法律で罰則もないため持つてかれて売られてしまうのだ。

嗚呼無情とは誰の言葉だったか、まあどうでもいい。

日曜大工で最低限の工作技術を上げつつ一年ほど必死にがんばっていたら、さすがにあわれに思ったのか神官のお姉さんから冒険者ギルドとして使っている建物である、通称神殿と呼ばれる場所の一角を建設場所として提供された。

無論それからはそこを寝床として使っている。

獣の皮で作った寝袋モドキ、意外とあったかいです。

雨の日は辛い。

それからはわき目を振らず小屋を作っては取り壊す日々だ。

なかなか納得できる建物はできない。

必要な空間は寝る場所と最低限の物置なのでそれほど大きくないのが救いと言えば救いだ。

さて、そんなこんなでさらに二年が過ぎた。

だんだん望んだ家ができてきたのが嬉しくて、つついほかの事まで頑張ってしまった。

まず作ったのは井戸だった。

もうね、面倒なんだもん、川までお風呂入りに行くの。

ただ、なめていたと言わざる負えない。

レベルアップで元の世界で考えたら人外な力と体力をもってしても一年かかった。

まあその一年は壁用の煉瓦作ったり煉瓦作ったり煉瓦作ったりした時間で半分を占めるのだが。

ここまでで町についてから四年が経過した。

ただ、井戸はギルド関係者に感謝された。

普通は井戸なんて掘らず近くの川に水汲みに行くらしい。

水汲みが下っ端の仕事でもあったので、下っ端の皆様方には本当

に感謝された。

まあそれでも井戸から水を引き上げるのは辛い。川までを往復するよりは楽なんだろう。

変人と見られながらも快適な生活のため頑張った、超頑張った。ものができるまで周りからはひたすら地面を掘る可哀そうな子ども扱いだったが。

次に手を出したのは鍛冶だ。

ダンジョンで出る鉄鉱石をため込み必死に頼み込んで鍛冶屋に疑似弟子入り（目的のものが完成するまでと言っ期限付きで）した。どうしても欲しい物があったのだ。

お金もないので必死に自分で材料を集め施設を貸してもらえよう交渉したわけで、何かを教えてもらっ約束をしたわけではない。

まず鉄鉱石からまともな鉄を生成するのに一年かかった。

下働きモドキをして技術を盗むのに一年かかったとも言っが。

鉄鉱石から鑄型に流し込み失敗せずにできるようになるまでさらに一年かかった。

以外と気泡が入ったりして不思議なほど脆くなるため難しかったのはいい思い出である。

鍛冶屋のお爺さんが途中から孫のように可愛がられていたが、鍛冶に甘えは許さんとこれでいいかなと思っても厳しく指導してきた。完成したのはレール付きの窓である。

ガラスの方は白っぽい半透明ながら結構簡単にできた。

集める材料がわかっていたからだろう。後なぜか鏡もできた。

必死に目の細かい砥石で磨いて鏡状にした鉄板をガラスコーティングで錆びないようにしたものだが。

こっちは必死に透明な英石やらなんやら探して限りなく透明なやつで作ったので鏡としてちゃんと機能している。

まあガラス流し込む時に少し色が変わってしまったがそこらへん

は許容範囲だろう、綺麗だし。

正直男のうちは鏡なんて使わないが。
なぜ作^{んだ}ったし。

おっと元の世界の方言が出た。

後々の事だが、なぜか神官のお姉さんが使いに来るのである一室に設置しておいた。

ちなみにかなり馬鹿でかい全身用の鏡である。

ちなみにヒビ入れたやつはぶっ殺すことしているが、幸い入れるやつはいないようだ。

なぜ作^{った}かは激しく疑問だが気にしたら負けな気がする。

ちなみに後でわかった話だが、ガラスはすごい高級品でこんなほつたて小屋に使うようなものではないらしい。

普通の窓は開ける時は開けっ放し、閉める時は板をはめるんだとか。

でも冬寒いじゃん、明かりどうすんのよ？ と本気で思うがそのせいで凍死者が出るとか本末転倒だと思っただが。

え？ 技術の一般公開？ お爺ちゃんがやってくれるそうです。

そして本命、中の量が見える覗き窓付きタンクに水道管、井戸用の手漕ぎポンプである。

そう、水道だ。

シャワーを再現するのはしんどかった。

金属板に穴をあけるのがあんなにしんどいとは知らなかった。

無論暖める機構なんてないので水しか出ないがこつちの世界では画期的発明である、一般には理解されなかったが。

冬は水道管の中が凍るだろうかそこらへんはしかたないと諦める。井戸の底が地下なので凍らないが、手漕ぎポンプ内の水が構造上

どうしても凍る。

冬はポンプあるのに手動でくみ上げとか無様をさらす事になりそうなのでどうにかしたいと思う。

まあ水道管は無駄に太くしてポンプは一々水抜けばいいんだらう

けど。

ここまででさらに一年がった。

うちがこの町に来てから気づけば七年がたっていた。

そして、小屋もとい自宅が完成した。

さすがに自宅を建てるのは気が引けたので十にも及ぶ仮眠室、シャワー室、簡易倉庫を作りうちが使う一室を除いて公共施設とした。ちなみにシャワー室の窓は覗かれないように不透明の光を通す程度にしてありかつ高い位置に設置してあるので覗きはできないのだ。ふん下っ端教主ども、涙を流しても事実は変わらんかな？ 割ったり穴開けたりしたら死なない程度にぶっ殺す。

まあ基本的に使用するのは神官さんたちとギルド関係者の一部だが、使用料金がほんの少しだが自分に入るのはうれしかった。

まあ、一番再現が難しかったゴム部分は最弱モンスターことゼリーが出す柔らかくしたスーパーボールのようなプニヨ玉を加工して作った。

そして水道を設置した、試運転が終わると神官さんたちがすっ飛んできてなんで井戸をふさぐのかと言ってきた時は正直マジでビビりました。

もうすごい剣幕だった。

まあ結果だけ言えば、ポンプと水道が便利だという事で神殿側で使う分を作らされたが……。

まあそのおかげでタンクに水を補充するのは下っ端さんたちがしてくれるらしい。

ちなみに貯め水は衛生的に危険なので、毎日使い切り翌朝補充しなければならぬ。

そして気づけば簡易倉庫は尋問室に化けていた。

まあ、自分が使っている倉庫は町で借りているものなので特に問

題なかったが、掃除用具が置いてある尋問室がシユールすぎるのに笑った。

ちなみに尋問室に選ばれた理由はこの小屋がかなり頑丈でかつ手ごろな大きさで、この簡易倉庫に窓がないためらしい。

ちなみにベッドはスプリングが作れなかったので、プニヨ玉で簡易ウオーターベッドになっている。

プニヨ玉を細かく砕くのに物凄い苦労したなあ。

布はいいのがなかったので馬鹿でかい兔っぽいやつの毛皮で代用している。

あの兔も人に馴なれるなら可愛いから大人気だろうに、なぜ自分の容姿を利用しないのかね？

ちなみに代用品だが、ウサギっぽいやつの毛皮を正四角形に切り出し縫い合わせた贅沢な一品で、そこいらに売り出せば王族が買っ
ていくだろうとの評価を貰った。

ただ材料が全てモンスター産のため非常に値段が高く、一般の商人や大工ではまず作れないと言われた時は泣いたが。

そもそも冒険者でこんな生産スキル高いのうちくらいじゃなかるうか？

でも木枠にプニヨ玉詰めて兔の皮を縫い合わせてできた布を張り付けただけなのになあ……。

ちよつと獣臭いが半年もするとうちの体臭の方が染みついたのか、それもなくなった。

まあ結構洗ってるせいもあると思うが。

無論毛布とかもないので兔の皮で作った着ぐるみモドキの寝間着で寝る。

毛布はやはり兔の皮で作った毛布だ。

夏は暑いので使わないだろうが冬は快適だ。

そしてうちが待ち望んだ快適な生活が訪れたのだった。

なお、羊皮紙が主流みたいだったので和紙の作り方を教えたら研究が始まったっぽい。

大事になったのは決してうちのせいじゃないと信じたい。

ただ、突飛な事をして冒険者ならおおむね受け入れられるという事を実感した。

ちなみにだが、ベッドが設置されているのは自分の部屋だけである。

気がつけばこの町に来てから八年がたっていた。

気がつけば木の小屋から煉瓦の小屋にレベルアップしていたが気にしてはいけない。

中はちゃんと内装やつてるので相変わらず木製だ。

時間が過ぎるの早いなあ。

〈神殿のマスコットモドキになってからの話〉

それからダンジョンに潜る日々である。

まあ毎日潜っていたが。

一時期狂ったようにゼリーとホーンラビットを殺して回っている子供が噂になったが気にしないっいたら気にしない。

そのせいで元の服が赤黒くなり使えなくなったのは悲しかったが、もはやあんなボロイ服を着る意味もなかったので捨てた。

とりあえず今は最下層である五十層を目指して頑張っている。

ちなみに、なぜか神官服モドキを着させられているため普通の服はもってない。

そんなお金はないのである。

全て貯蓄している。

そして転機は訪れた。

この町に自称勇者を名乗る（ある意味）猛者が現れたのだ。

自分と同じ転生者か？ と思ったが、何やら称号に勇者というのがあって、それがあると特別な運命に巻き込まれるらしい。

ふと気になって確認してみると自分の称号が変わっていた。

まず「家出人」から「神殿の隠れマスコット」に、「光化学狂信者」から「未来科学狂信者」に。

後「技術屋」ってのがついた。

技術にパクリってルビ振られているような気がした。

確認のためもう一度ステータスを呼び出したら消えていた。

気にしたら負けだ。

確かに自分で考えたわけじゃないけど、自分で考えたって明言した事ないぞ、そこんとこどうなんってんだシステム。

それに今更だが、家出人はわかるとして光化学狂信者は意味が分からなかったが、もしかしたら生前レーザー兵器に浪漫を感じていたからか？

もしかして世界基準でそんなものへの理解と興味からそうなったんだろうか？

正直どう考えてもオーバーテクノロジーだし、知っているのは自分ぐらいだろうからもはや狂信と言うべきレベルで存在を確信してたせいだな、たぶん。

まあそんな事はどうでもいい。

問題なのは基本勇者は固有^{ユニーク}モンスターに遭遇しやすくお人よしである。

つまり、協力して倒せば固有^{ユニーク}アイテムを貰えるかもしれない、たとえそれが初心者用の上位武器だったとしても。

ちなみに上位武器ってのは神様とやらの祝福された自己修復機能付きの丈夫な武器の事である。

それに対して下位武器というのは人間が作る武器の事で、良品は中位武器と呼ばれたりするが正式には下位武器の分類となる、らしい。

結論から言えば、勇者様強すという何とも言えない結果になった。正直こっさりついていくだけで初めて五十層突破したわけだ。

ダンジョンを突破すると宝箱の部屋に転送されていた。

転移魔法があるので驚かなかったが、ダンジョン攻略そのものに特典があるのは知らなかった。

たぶん教えるまでもなくみんな知っている事なのだろう。

そして勇者と逸れた^{はく}。

後々知った事だがパーティー登録をしていないと別々の部屋に転送されるらしい。

登録をしていると一緒に部屋の転送され、人数分宝箱があるんだとか。

中身は紫色をしたホーンラビットの角だった。

ホーンラビットの角は腐るほどもってるよ、正直いらねーとその時思った自分を後々になって殴ってやりたくなったのはまた別の話である。

確認が終わると自動的に外へ転送されたのでとりあえず帰る事にした。

外は暗くなっていたので月明かりでのシャワーもそこに寝ようとしたら猫の人、通称猫神官の人が乱入しうちはなぜか抱き枕になった。

眠かったし、体ができてないせいかな性衝動もないのでそのまま眠ったが、やっぱり女の人って柔らかいねというのが感想である。

ちなみにこの猫の人、すごく気まぐれで本当に猫っぽいのだ。

しかも元の世界にはいなかった半獣^{ワイルドハーフ}というか猫耳娘^{キャット・ウーマン}というか、そういう見た目の人だ。

ダンジョンに潜り始めた最初の頃何度も死にかけたが、地上で血だらけな自分を見つけてもほぼ無視だし「助けてほしいなー」といっても「そう」の一言で終わらせた猛者である。

せめて医者を呼んでほしい。

かと思えば気が向いた時だけからかわれるというか遊ばれるとい

うか、玩具扱いされるので正直ちよつと困っている。

このごろはさすが猫の人と納得する事に行っているので気にしていなかったが、もしかして発情期？

いや、そんなあそぶりも行動もなかったし違うか。

まあそんなこんなで驚く事はそれぐらいだった。

のち分かった事だが、手に入れた角はこのダンジョンの一番上位なレアアイテムで、勇者様のものを横取りしてしまったらしい。

さすがに謝りに行ったのだが、まあランダムなので気にするなと言われた。

正直こういうのは勇者に流れるような物でしょ？

そこところどうなんだろ、もしかして自分もなんか厄介ごとに巻き込まれる運命だか何だかなのだろうか。

まあそんな事はなつてから対処するから問題ない。

勇者なんてのがいるんだ、丸々投げてしまえばいい。

それより重要だったのは、手に入れた角である。

名称を精霊獣の角といい、上位ダンジョンに行くところそこ手に入るアイテムらしい。

軽く恐ろしく丈夫なのでショートソードにしてもらってから二年間今の今まで使い続けているメイン装備だ。

まあショートソードとは言っても、うちの体が小さいため比率のせいでロングソードに見えるんだけどね。

そういえば今年でダンジョンに潜り始めて十年目に入るわけか。

そういえば一部素材の安定供給とかやってたら「ダンジョンの主」とか「エターナルの人」とかよくわからない称号がついていた。

まあ確かにダンジョン内で人助けとか結構したけどもダンジョンの主ってうちはこのダンジョンのボス扱いか！？

まあ神殿で確認したら民間称号だったのでダンジョンに潜る有名な子供として知れ渡ったせいだろうとの事。

後潜っているダンジョン名がいつの間にか初心者ダンジョンになっていた。

あれか、色々な人に教えたりこつそり助けたりして生還率上がったせいかな？

上級者ロールプレイして初心者育てたせいかな？

まあいいや、関係ない関係ない、気にしたら負けである。

話を戻すが、称号には二種類あり、一般からの認識と呼び名でつくのが民間称号、神様とやらが付けてくれるのが特級称号というらしい。

ちなみに称号で特典がつくわけではないが、ものによっては一般社会で自慢できたり就職が有利になったりするらしい。

まあそんなこんなで今に至るわけだ。

後余談だが、今回会った勇者様俗に言う不幸系で周囲の人間に幸運をばら撒いてしまう人だったらしい。

通りで一人きりだったわけだ。

第一話 思い出す過去（後書き）

一話終了時点での主人公ステータス。
スキルでない自力での物作りは生産スキルには含まれません。
なお、祝福は無条件に詳細閲覧可能。

名称：ファイフィル・ファウ・フォリア 職名：ファイ

職業：初心者

転職可能職業：職業訓練生

称号一覧

「転生者」特級称号：システム権限により詳細閲覧不可

「神殿の隠れマスコット」民間称号：冒険者ギルド関係者からの称号

「技術屋」民間称号：一般民家からの称号

「ダンジョンの主」民間称号：冒険者からの称号

「エターナルの人」民間称号：冒険者からの称号

<<特殊技能一覧

>魔法：ステータス閲覧

・Lv.1 名前、職業、称号、本スキル詳細と技能一覧を閲覧可能

・Lv.2 状態、称号元、技能詳細、転職可能職業を閲覧可能

・Next-count 243

>魔法：生命力回復補助

・Lv13 活力を回復可能、ただしカロリーを大幅に消費する。

効果一、一定時間生命力の上昇により傷の治りが早くなる。

効果二、一定時間気力などで動けなくなっても動けるようになる。

>魔法：肉体活性化

・Lv30 新陳代謝を向上させるがカロリーを大幅に消費する。

効果一、身体能力の上昇、傷を治す速度の上昇。

効果二、免疫力向上にとまなう解毒速度の上昇。

<<祝福一覧

> 長命種の宿命

- ・ 成長速度干渉「低下補正」
- ・ 特殊技能干渉「成功率低下補正」
- ・ 生産スキル干渉「成功率低下補正」
- ・ レベルアップ速度干渉「低下補正」
- ・ レベルアップ時ステータス追加上昇
- ・ 転職制限「基本職の転職不可」

第二話 生活に慣れた生活（前書き）

今回から結構な数の名前付きキャラクターが参戦。

ダイブ物語らしくなってきたがなんとというか、中途半端な一人称が凄くやっかい。

変な癖なので治したいがいかんせん無意識なので難しい。

誰か助けてたもれ。

なお、今回のタイトルが変なのはワザとである。

そろそろマジでダンジョン探索描写を入れたくなってきている。

ただ生活も書いていて楽しい、これは問題だ。

第二話 生活に慣れた生活

幼子は夜明けに笑う。

そんな伝説ができようとしていた。

「な、何だっつてー!？」

ただし棒読みである。

事の始まりはステータス閲覧魔法、まあコール系と呼ばれる魔法だがそれがレベルアップした事に端を発している。

もう何十何百とダンジョンを走破している。

そして基本的に時間のないうちは敵を瞬殺しなければ悲しいほどに時間が足りなかった。

結果、どこその武将の如く国土無双してやんよと言わんばかりにここ十年で瞬殺を極めたわけだが、それはどこそのMMORPG(多人数参加型大規模ロールプレイングゲーム)の如くドバドバダバ湯水のごとく経験値を得られるという事であるわけだ。

実際には少し違うのだがまあそれは別の話である。

つまりは普通の人の百倍必要であっても普通のゲームに換算すればうん十倍、場合によっては百倍強の経験値を得るという事である。そんなこんなで十年、まあモンスターのコアを狙った瞬殺を極めてからなので実質五年ほどだが毎日毎日レベルアップしてるような感じになってもおかしくない。

というかある程度そうなつてたし、最初の頃は一日十とか二十とか上がる事があつたし。

結論。

問題の部分までステータスを表示すればこういう事である。

名称：ファイフィル・ファウ・フォリア 職名：ファイ

職業：初心者

転職可能職業：職業訓練生

LV：99 / 99 EXP：99・98% NEXT：13452

限界値寸前でした。
カンスト

あと一回ダンジョンに潜ればカンストするね。

いやね、正直な話転職ってどうやるんだろー？ とか疑問に思ってたんですよ。

でも、忙しいし後でいいよねーとか思っちゃったわけですよ。

つまり、「エターナルの人」＝「自主的永遠の初心者モード」というわけだったのだ。

つまりニート。

そりゃ永遠エターナルって呼ばれるわ、マジで。

もちろん就職先がある方がおかしい。

でもでも、もしかしたらカンストしないと次の職業とか無理なのでは？ という最後のあがきで公共図書館に調べに来たわけだが。

「ふむふむ」

初心者指南書なるものによると

・初心者はレベル十で職業訓練生に、職業訓練生はレベル十五までに各専門職につく事ができる。

・各専門職になって半人前。冒険者としてそれ以前の状態では、身体に障害を抱えるものと同等の存在として扱われる。

・初心者と職業訓練生はお金を払ってもさっさと抜け出すものでそれ専用の学校が存在する。

・なぜなら下位職と呼ばれるそれらは専門職ごとにある特殊な技能、魔法を一切覚えられないからである。

・さらに、下位職は転職するとレベルが一に戻るため受けていた

レベルの恩恵を半分以上を失う。

・どの職業もレベル限界値に達してから転職すると祝福があるが、基本的に実践するのは歴戦の戦士ぐらいである。

・レベル限界値は職業ごとに違う。

・転職時、下位は全て、上位は半分のレベルを失う。ただし、下がったレベルに対し約半分の恩恵を転職ボーナスとして受ける事ができる。

・大抵上位職が上限にいたるまでに必要な年月は戦い続けて八年から十年と言われている。己の進路を決める参考にせよ。

まとめるとこんな感じであった。

正直、どっかの六法全書だか広辞苑みたいな厚さの子供向け教科書みたいな本を読むとか拷問だったが子供向けだけあって無駄に分かりやすかった。

あえて言おう。

普通の人が普通に狩りして八年から十年、酷いともっとかかるわけで、特殊な事が何もできない半人前以下の状態で上限到達は狂気の沙汰であるという事だ。

つまり、やつちまいました。

冒険者でも絶対やらない奇行に走っていたわけで、そりゃアンだけ素材回収しといて初心者とか狂気の沙汰で有名になるわほんと。

もうね、門番さんとか各公施設の受付の人とかに顔パスなのも納得だわ。

問い合わせるまでもなく本人ですという完璧な証明がされてる。

何それ勇者とかより有名なんじゃね？ ある意味。

まあ運が上がるラビニアと言われていると（はいえ馬鹿でかいウサ耳を常時つけてるのは兎人かうちくらいでしかもうちは明らかにつけ耳かつ十年以上も子供やってる種族なんて長命種ぐらい）。

しかも一般のために技術解放？ おたく馬鹿なんじゃないのと言われても反論できません。

いやあ、何度か暗殺未遂されたから何かと思ったら製造ギルドのガラス部門だったのね。

まあ効率的な材料の採取法とかうちが作った窓枠の製造法だとかお爺さんが気を利かせて色々ゆずったんだろう、ギルドが製造しているのを見るに。

そのせいでガラスの値段が暴落したかな！ 陶器部門とは作るものによる住み分けでもしたんだろうガラス窓ばっか作ってるのを見るに。

とりあえず、さすがお爺ちゃんと言わざるおえない。

ナイスだお爺ちゃん！

最高だぜお爺ちゃん！

ビューティフル……、はちよつと違うか。

まあそんな話は置いといて、この初心者指南書は親切で色々な事が書いてある。

たとえば初心者がやらかす失敗とか暗黙の了解とか色々だ。

本によると職人は食ってくために基本秘伝を外に漏らさないらしい。

まずここでうちアウト、一度目の暗殺はこれか？

本によると長命種は人里離れたところで暮らしており里から出てこず、非友好的で他種族には恐ろしく冷たい。

次にここでもうちアウト、二度目はこれだろうか？ いや導入された人員を見るに三度目だろうきつと。

本によると神殿は神聖で不可侵、私的に使ってはならない。

さらにここでもうちアウト、実はこれが三度目とか？ それだと推測が合わないな。

本によると神殿での争い事はご法度、したら冒険者による冒険者のための集団リンチ確定。

セーフなようでアウト、口うるさい神官さんと結構喧嘩した覚えがあるわ。

結論。

あれ、うちやばくない？

まあ後々調べてわかった結論だけ言うと孤児院も兼業してるので、うちはある意味では明らかに子供なので問題ないらしい。

普通孤児は知り合い程度でも知っていけば引き取るらしいので基本発生しないが、子持ちの旅人が死んだりするとたまに出るらしい。そもそも子持ちは旅なんてしない、子供は世界の宝ですが暗黙の了解。

そんなわけで孤児は滅多に出ないので気づかなかつたのだ。

つまりうちが作ったのは仮眠室兼孤児院モドキとなっていたわけで、道理で一般の方々も一切文句を言ってこないわけだ。

孤児が孤児院作るってどうなのよってのは言ってはいけない、気にしたら負けだ。

まあ、今度から技術公開する時は誰かに相談しよう、お爺ちゃんとかお爺ちゃんとかお爺ちゃんに。

井戸とポンプあるし、水道技術は便利なので是非普及してほしい物だ、主に公共施設に。

ああ、そういえば冒険者なのに税金払ってないなー催促来ないし、思ってたら実は孤児と引き取り手含め免除らしい。

孤児を預かる家の家族も免除らしいのでみんな進んで引き取るわけだ、結構高いし。

子供のいる家にそれなりの支援が出てるし子供に対しての免除が多い。

それで税金高いんじゃないの？

まあ閑話休題。

問題なのは何か？

いやね、今から転職するとなんか負けた気がするんだよね、後ゼロコンマゼロ二パーらしいし。

とりあえずギルドカードナンバーの下三桁が六百六十六なものなんか嫌なのでさっさとレベル上げて転職してしまおうと思う。

ちなみにギルドカードナンバーはランダムで振られ、かつ職業別に管理されているらしい。

どこぞのデータベースみたいなシステムがあるみたいである、そういう概念は無いみたいでどこぞの天才が構築したのを使っているらしい。

夢が広がる憧れる？ いいえ楽な暮らしがしたいだけです。

そしてそろそろまともな食生活がしたいなあ。

ほとんどモンスターの肉と保存食ってどんだけーという話である。ああそうそう、プニヨ玉だが基本的に食材扱いだったのに笑った。どうやら元の世界でいうゼラチンのような働きをするらしい。

しかも無駄に高濃度で一つのプニヨ玉で一人分近くゼリーが作れるとか。

……正直建材だと思ってました。

いやね？ 熱を加えると柔らかくなって最終的に液状になるんだけど、基本的に水弾くし固まると硬くなってとてつもない接着力があるので水道管つないだりするのに使っていました。

しかもそれ以降は熱を加えても変化しないし、鉄が溶けるレベルの熱じゃないと燃えないので絶対に建材だと思ってたんだ。

そして調べてみると実際に建材としても使われてたのに笑った。ただし、プニヨ玉に一切混ぜ物をしない場合の効果らしく建材として使う場合数をそろえなければならず非常に高価になるため貴族や王族しか使わないんだとか。

食材として使う場合はすり潰して粉っぽくしてから小指の先ほど少量を大なべにいっぱいまで入れた水に混ぜてから使うんだとか。

正直すり潰すのがメンドクサイので加工費払って作ってもらいました、十個分。
びっくりしたのが防腐剤の役割もするらしく作ったゼリーは大抵半年から一年持つらしい。

ただし味はさすがに劣化するので保証しないと商店のおやつさんは笑ってたが。

供給を増やしたせいかわりにプニヨ玉の研究が進んだらしく、コラーゲン風呂みたいな使い方をする馬鹿貴族が増えたんでもうけさせてもらってるとかも言ってたな。

それならコラーゲンパックとかもいいんじゃないかな？ とうか本当にプニヨ玉って高濃度コラーゲンもとい高濃度ゼラチンなの？

正直予想外すぎる。

後植物系モンスターから片栗粉が作れるらしい。

モンスター＝食材の理論は不思議な事に常識みたいだ。

ただしモンスターの死骸が残るのはダンジョンの外なので、一階層でそのモンスターが出現するダンジョンの近くでしか取れないんだとか。

香辛料系は素材として残るらしいのでダンジョン内でもとれるらしい。

まあ閑話休題もここら辺でいいだろう。

ダンジョンへ潜ったが残り必要経験値が後二桁なところで攻略完了してしまった。

正直忘れていたので悔しい。

いやね？ うちだって半分ぐらいまでは覚えてたんだよ？ 今日は無駄にレア素材が出るのがいけないんだ、行く先々でレア素材が山のように出るのが悪い。

なにせ十年乱獲して初めて見るアイテムもあったし。

地上で遭遇してもレア素材って手に入らないんだよね、同じ部位をとっても鑑定かけると普通の素材だし。

まあ簡単に一覧にすると次のようなものが出たわけだ。

魔獣のコア：各魔獣から「魔獣名コア」形式で出る。武器防具作成時に混ぜて作ると特殊な効果がつくので非常に高価、下手したら家を買うレベル。

魔獣の肉：各動物系魔獣からとれる「魔獣名の肉」形式で出る。

結構おいしく非常に痛みにくいいため長期保存が可能なので旅のお供として重宝されている。

兎の耳：アクセサリにして装備すると運が上がる。今使っているのがボロくなってきたので正直嬉しい。これも無駄に高いが、出現率がそれなりでかつデカイのであまり好まれない。

兎の尻尾：兎の耳と同様、しかし小さくまとまっているので人気がある。こっちは初めてお目にかかるほど珍しい上に目玉が飛び出るほど高価、城が買える。

設置型トラップ各種：素材ではないがダンジョン内のトラップを解除、回収したもの。正直作る技術がないので非常に便利に使っている。

緋色の骨：陶器の素材としてよく使われるもので、真っ白い下地に緋色の模様が入る非常にきれいな陶器になるが、ドロップ率が悪いためにあまり出回らない。

黄金の骨：金色の骨で実際には黄銅。高級な食器などの材料として重宝されている。ただし、あくまで冠婚葬祭や祭り等で使われるものがほとんどで嫁入り道具として有名。

マンドラゴラの根：魔法薬の材料になる魔力を多量に含む植物。ただし毒性が強く熱処理をしないまま食べると死ぬ。

ドリアードの葉：魔法薬の材料になる魔力を多量に含む植物。ただし幻覚作用が強く熱処理をしないと大変な事になる。

紫狼の爪：ポストドロップ。毒を持つ紫色の巨大な爪。加工すると

トリカブトと同じ強心剤になる。見た目が綺麗なためかお守りとしても人気が高い。

紫狼の牙：ボスドロップ。毒を持つ紫色の牙。加工すると麻酔薬に化けるので重宝されている。男性用首飾りになる事もある。

クリア特典：今回は一角獣の角。脆いが非常に高価な薬の材料、しかし基本的に小さいので一つではそれほど価値もない。一つで大体一回分の量。

祝福された鉱物：「祝福された鉱物名」形式で出る原石ではなく製錬された塊。品質が非常に高く水道管の材料として活躍している。

兎の耳と設置型トラップ各種、黄金の骨、祝福された鉱物を除いて初めて見る素材だ。

もちろん普通のドロップ品はいつものようにかなりの数拾ったが全部捨てても問題ないレベルのドロップって一体なんなんだ？

正直今まで稼いできた総額より稼いってしまった気がする。

あれ、もしかしてうち今日死ぬの？

いやいやいやいや、普通にダンジョン脱出してるからそれはないな。

ちなみにダンジョンだが町の中央にあって常に監視されているのでモンスターがあふれたり出たところで襲われるなどの犯罪が発生したりは滅多にない。

まあ、大抵の冒険者は道具袋に入れ見えないようにして出るので高価なものを持つているかどうかも分からない相手を襲うほどの価値はあまりないせいでもあるが。

なによりこのダンジョン、生活用品が良く出るが基本的に低レベル系で固められているため正直稼ぎも少なくあまり人気がない。

まあ、噂によるとレアドロップの確率って波があって数十年に一度とてつもなく高確率で落ちるとか聞いた事がある。

きつと運よくそれにあたったんだろう。

ありがとう兎の耳もといつけ耳、きつと君のおかげだ。

しかし全部うち自身で使う素材ってどういう事ですか、正直全然稼いだ気がしません。

「おう坊主、今日も研究かい？」

「あ、ミノのおっちゃん。さすがに毎日研究してるわけじゃないよ。今日は首飾り用のヒモ二本と薬瓶四つ頂戴」

「なんだ、また薬の材料手に入れたのか？　さすがは神殿の薬庫だな」

「いやそれ言ってるのおっちゃんだから」

ちなみに今のは商店のおっちゃんことミノタウロス系半獣ワイルドハーフで種族的には体力自慢の牛獣人である。

この無駄に巨大な商店を経営する敏腕経営者である。

基本的に素材はこの商店に流すので、この商店に並ぶ素材の七割がうちが供給する物とか笑いそうになる。

ちなみに、自力で疑似ウォーターベッドを作った猛者でもある。

さらに自力で室内に井戸も掘ってしまった。

うちが供給したものと言ったら煉瓦の作り方と手漕ぎポンプぐらいである。

夏は冷たい水売って稼いだらしい。

冷却魔法で作る氷を使った力キ氷を教えたら毎日くれたっけ。

かけるものが練乳で、供給元が胸の大きな嫁さんとかリア充爆発すればいいのに。

まあ、どう見ても嫁さん含めミノなのでそこまで羨ましくないが。まあそんな話はどうでもいいだろう。

このおっちゃんも物作り大好きでうちの真似をして大抵のものを作ってしまう。

現在商品が並んでいる棚やら机やらは全部おっちゃんの手作りで、改装も増築も全部自分でやっているらしい。

しかも綺麗な嫁さんがいる勝ち組である。

未だ子供はいないがまだまだ若いので問題ないらしい。

「いやいやご謙遜を、神殿の薬師と言えば貴方様ですよ?」

「いや誰だよテムエ。というかそんな称号うち持つてないから」

「ワハハ、まあでもな、この町で一番薬もつてるのはお前らしいぞ? 腐らないとはいえ一体どれだけため込んでんだよ」

「そりや何があるかわからないから作り置きぐらいするよ。正直これらのヤブ医者には信用できないし、誰かから聞いたから薬なんて理論うちは認めない」

正直この世界の薬を使う医者は半分ぐらいが昔ながらの薬草系で全体として七割がヤブというか駆け出しである。

医学の門は非常に狭いのである。

うちだつて薬学全集なる調査書がなければまともに薬作れないのに何も知らない駆け出しに同じことができるなんて思つてない。

なぜ図書館にある薬学全集を読んないやつが医者なんてやってるんだと本気で思つたぐらいだ。

ちなみにこの薬学全集、昔いた狂人が数々の人体実験の末書き出した確かな実績と後ろ暗い過去を持つ禁書の一種で、しかしなぜか図書館に置いてあるというとんでも本だ。

ただしうちもある種ヤブ医者である。

正しい薬の知識は持つていても診察の技術も経験もないので実際にやると失敗するに違いない。

「さすがに子供に診察してもらおうなんて変な奴はいないと思うが気を付けるよ? 命に係わる以上かなり変な言いがかりつけられるからな」

「もちろんそこは気を付けるさ。というかため込んだ薬はうち用であつて誰かに使うためのものじゃないよ」

「ま、困つたら分けてもらいに行くからその時は頼むわな。ああ全

部で十五エクな」

「ういよ。またなんかあったらお願いね」

「おうよ！ 大切な業者様だからな。今後もしっかり納品頼むぜ」

「……あのねえ。まあ業者なんて言葉教えたのうちだけどさ。ああ
そうだ、これちょっと粉にしてもらうていい？」

渡したのは紫狼の牙で、麻酔薬を作るための材料だ。

「おうよ。ゴリゴリっと。にしてもこの鉄のすり鉢丈夫だな。どのすり鉢使っても壊れちまうから苦労してたんだ。粉は薬瓶の一つに入れればいいな？」

「そうしてくれると助かる。まあ助かってるならよかったよ。正直作ったはいいけどめんどくさくて使ってなかったんだよね。じゃあまた今度やらせてもらおうよ」

「ああまたな」

「またねー」

とりあえず商品を受け取り帰るのだった。

〈薬師ファイフィルの日常〉

さて今日の薬はえーと、麻酔薬と魔法約二種類か。

これができたら五十種類超えるな、結構たまったな。

材料はダンジョンでとれる素材の数々である。

まず麻酔薬だが、これは紫狼の牙を粉にして高濃度アルコールに付け込むと麻酔薬が出来上がる。

すでに粉になっているのでドロップ品の高濃度アルコールに付け込む。

比率は粉一に対しアルコール一万である。

牙一つで大樽一個分の麻酔薬が出来る。

後どういうわけか粉を入れて一週間ほどでアルコールが一定温度まで蒸発しなくなるが、そこらへんはファンタジーと割り切っている。

採算性を無視すれば液体燃料としても使えるが、本格的にもったいない使い方なので命がかかわらない限り普通の人はそんなことしない。

ちなみにこの高濃度アルコール、お酒としては不味いらしい。味がしないとかなんとか。

うちはお酒飲まないのだからないが、味がなければ飲み系の果実酒を作ったら美味しいんじゃないかな？

まあそれはそうと、付け込んだものを一ヶ月ほど熟成？ させるのと従来品より強力な麻酔薬になる。

基本的には霧吹きで幹部に吹き付けて使うらしい。

従来品は塗って使うのだが、効果が出るまでにしばらくかかる。効果はかなり強いので直接かけるのは絶対してはいけないらしい。かつ、速効性なので分量を間違えると危険だと言われている。

なおこれを水で百倍に薄め、薬草の粉を一束分とプニヨ玉をほんの少量入れて作られるのは応急薬と呼ばれる塗り薬で、戦場で良く使われるらしい。

兵士や冒険者の必須アイテムとか言われていて、まあ簡単に言うのと痛み止め兼傷薬である。

本当に速効性なので致命傷を負ってしまった仲間に原液を飲ませ、最後の時間まで痛みを消し去ってやるのにも使うらしい。

飲むタイプの痛みどめにするには水で千倍で薄めるか、ぶつちやけ危険なためほかの薬を使う。

さて次の薬だ。

えーと、紫狼の爪は穴開けて紐通して首飾りにするから魔法薬の

類か。

まずマンドラゴラの根は一度どろどろになるまで煮込んで成分を抽出するがこの建物では台所にあたる部分がないので外でやるしかない。

そろそろ寒くなってきたのでちょうど良いっちゃちょうど良いんだが、まあこの前みたいに近所の女の子雇うか、安いしお菓子やつてれば文句出ないし。

というわけで三軒隣の犬っ娘を訪ねる。

ちょうど外にその子の母親がいたので聞いてみる事にしよう。

「こんにちは、リアさんいますか？」

「おや、神殿の秘蔵っ子じゃないかい。また調合かい？」

「はい、ちよつと煮込まなければいけないものが出まして、ちよつとお手伝いをお願いしようかと」

「はいはい構わないよ。ただあれはちよつとお給金出しすぎじゃないかい？ 子供のお小遣いを超えてると思うんだけどね」

「いえ、結構大変な作業ですし大人ですとこの三倍は出さないといいけませんし妥当な額ですよ。問題であればお給料はもってきますので分割して渡してあげて下さい」

「まあ確かにそれがいいかね、じゃあ次からそうしておくね。ちよつとリアー？ 神殿の兎さんがきてるよー！」

……兎さん？

まあ確かにいつもウサ耳つけてるけどさ、運が悪いから。

後兎人は基本森から出てこないのその言い方はどうかと思うんですが、言いませんが。

「はいはい。ああフィーちゃん、今日もお料理作るの？」

「いやお料理じゃなくてお薬だからね？」

「だって人参煮込んでたじゃない」

「あれは蓬莱人参って言うて立派な滋養強壮剤の材料だよ？」

「でも美味しかったよ？」

「そりゃ甘いからね。飲んだの遅かったし眠れなかったんじゃない？」

「あー、確かに遅くまで寝つけなかったかなー？」

「とりあえず今日は二つあるんでお給料は一回半分出すよ」

「やった！」

リアのお母さんの目が光った気がした。

リアはまだ直接もらえない事を知らない。

「では手伝ってくれるようなので今回のお給料です」

「ありがとうね、じゃんじゃん使ってくれていいからね？」

「……え？ あれ？」

リアってこういう突発的な事態に対処できないんだよね、なぜか。

まあ貰えないわけじゃないからいいだろう。

「ほら、行くよ？」

「う？ あ、うん」

とりあえず孤児院の自宅に帰還。

鍛冶のついでに作ったデコボコ鍋を二つ出す。

ちなみに外にはあるが簡易的な竈が三つある。

ただし出来損ないでうち以外は誰も使わない。

なにせ小さい。

どう見ても子供用である。

ちなみに燃料は植物系ドロップ品で油をいっぱい吸っている薪と燃え出しようのスポンジっぽい何かである。

ちなみにこのスポンジっぽい何か、物凄くよく燃える。

火力も不思議なほど強いので薪や炭の着火剤として普及している。さて、とりあえずマンドラゴラの根を刻んで水を入れ、もう片方にはドリアードの葉をすり潰して水を入れる。

「じゃあ火をつけて色が変わるたびにこれを入れてね」

「うんわかった」

「うちは薬棚の整理やってるから何かあったら呼んでね」

「りょうかい」

ちなみに今渡した瓶は液化魔力と呼ばれる魔法薬の一種でドロツプ品である。

単体ではほとんど使い道がないが魔法薬の調合には必ずと言っていいほど使用する液体だ。

そしてうちは小屋の中に戻ったわけだが薬棚を見てやはりそろそろ分類分けするべきだと思いなおす。

正直適当に突っ込んであるだけなので何がどこにあるかあまりわかっていない。

ただし、何があるかはリストにしてあるので問題ない。

一時期瓶に薬の名前を彫り込もうと躍起になっていたのだが正直無理でした。

まあ金属のふたに文字を刻み込む方はどうにかなったので問題ないが。

そしてびっくりしたのがこの方法がある意味画期的で、誰もこの方法をとっていなかったのが笑える話。

やり方としては文字の形をした出っ張りのある金属棒をハンマーでたたきつけて文字をつけるのである。

今までは棚ごとに分類しておいていたらしく、空っぽなら作らなきゃなんともアナログで実用的な使い方をしていたんだとか。

それってスペース無駄じゃね？ という言葉で目から鱗だったとか。

正直整理がメンドクサイという話をちらほら聞くが薬を間違えるという話は聞かなくなった。

ヤブ医者はこれすらしないので未だに薬を間違えると聞いた事があるが、この町では表記のない薬瓶の使用を禁止しているのでそんな事は発生しない。

さて、未だに全容を理解できない薬棚だが、意外と日常で使う薬が多い。

分類としては次のようなものだ。

- ・ 傷薬（塗り薬）強さに応じて五種類
- ・ 痛み止め（原液ただし大樽のため薬棚外にて保管）
- ・ 痛み止め（塗り薬）強さに応じて十種
- ・ 痛み止め（飲み薬）強さに応じて十種
- ・ 風邪薬（滋養強壯剤）強さに応じて十種類
- ・ 胃腸薬（漢方薬っぽい何か）整腸剤と保護剤と抑制剤の三種
- ・ 興奮剤（魔法薬）疑似惚れ薬、疑似排卵剤、精力剤強さに応じて三種
- ・ 魔力回復薬（魔法薬）強さに応じて五種
- ・ 体力回復薬（魔法薬）強さに応じて五種

ちなみにほとんどは濃度の違いで薬の強さをわけている。

何せ必要な強さから離れすぎると毒になったり聞かなかつたりするのだ。

ただ胃腸薬系は漢方薬系統なので飲みすぎない限り大丈夫である。興奮剤はうち自身で使う予定はないが、おやっさん当りに差し入れようと思って作ったがいらなと言われてしまったために保管してあるだけだ。

二つ飲ませて一つ飲めば子供ぐらいできると思うんだけどなあ。

まあ奥さんもおやっさんに好きな事やらせてるみたいだし、もう少し自由でいたいんだろう。

ちなみに今作っている三種類は一番強い薬で、牙が痛み止め原液の上位薬剤で効果的には今ある痛み止めを濃縮したようなものだ。ただし今ある痛み止めに比べ効果時間が長く副作用も小さい高級薬である。

マンドラゴラは興奮剤の魔法薬版で混乱剤とか呼ばれることもあるほど強力な惚れ薬の一種だ。

ただし従来品のような飲ませるタイプではなく体に塗るタイプで、例えるならフェロモンのような効果があるらしい。

使うつもりはない、手に入ったので何となく作ってみただけだ。

ドリアードが滋養強壮剤の魔法薬版である。

非常に強力で死にかけてる相手とか衰弱してる場合とかにしか使えないだろうと思うが非常に強力であることに変わりはない。

少量で通常の滋養強壮剤と同じ効果があるので旅のお供として有名な薬でもある。

まあ今ある薬を棚ごと、強さごとに並べたがやはり結構な量が出てきている。

一回に使う量を考えれば軽く一年は医者をできそうな量だな。

今更だがなんでこんなに作ったんだらうか？

まあきつと趣味だ。

意味なんてない。

え？ 強心剤は作らないのだった？

正直心臓病なんて見てわかる物じゃないから作っても無駄だと思う。

普通毒として以外は使わない薬だしね。

さて、そろそろ魔法薬の方もできてるだらう、薬瓶もって外に出た。

「あ、お兄ちゃん。ちょうど今呼ぼうと思ってたの」

「ん？ どうした？」

「お薬が真っ白になっちゃったの」

ちなみに今作っている薬は両方とも最初は緑、煮ていると黄色になり液化魔力を加えると緑に戻り、完成すると白くなる。

なので問題なく完成したようだ。

分量？ 水と材料は最初に用意した両でいいし液化魔力は基本的にはほっといても全部蒸発するので何の問題もない。

「よし、完成したみたいだね。今日はありがとうね、はいべっこう飴」

「わーい！」

最初は金平糖を作ったのだが、予想以上にめんどくさく難しかったので最初の一家以外は全部べっこう飴だ。

ちなみに砂糖はドロップ品なので高級品である。

まあうちは乱獲する関係上、氷砂糖のような砂糖の結晶が大樽一杯分あるわけで特に気にせず使っているが、実は結構リッチな生活しているのかもしれない。

とりあえず出来上がった魔法薬を薬瓶に詰めてふたには仮のラベルをはっておく。

大抵の場合、蓋には後から刻印するのだ。

まあそんなこんなで今日の調合も終わり一息ついた。

気づけば真つ赤な夕日が綺麗な時間帯になっていた。

紫色になるまでには残りの作業を終わらせてしまおう。

ところで兎シリーズだが、大抵は金属で固定し輪を作りそこに紐を通して首からかける首飾り方式が主流である。

まあその場合耳はデカいので不評なのもわからないでもない。

ちなみに兎シリーズには耳、尻尾、腕、足、皮があるが皮だけは

別物扱いであるらしい。

というのも巨大兎の一枚毛皮は子供用の対呪魔具になるのでアクセサリーにはしないからだとか。

まあ、ここらには元となる巨大兎がないので手に入らないそう
だ。

まあそんなこんな兎の尻尾のアクセサリーを作る。

そういえばうちのようにつけ耳にした例は見た事がないが、
後で聞いた話だが、つけ耳というのは一般的に義手や義足等と一緒に
緒で戦闘などで欠損した獣耳の代用品という扱いらしい。

つまり、一般的に見たうちは兎人になりたかった長命種に見える
のだろう。

どちらにしても里から出てこない一族なので変わり物には違いな
いが。

とりあえず尻尾の方は従来の方式でいいだろう。

ちなみにだが、兎シリーズは全てが明るい黄色をしている。

兎人は耳から尻尾、体毛に至るまで真っ白なで間違えられる事は
絶対ない事をここに明記しておく。

そんなわけで詐欺とかもできない、もはや常識である。

爪の方は安全祈願のお守りになるらしいがよくしらない。

どうやら液体魔力に付け込むことによって魔具にするらしい。

対毒の魔具になるらしいのでうちも一応付け込んでおくことにす
る。

ここで重要なのは、牙だけでなく紐も同時に付け込まなければい
けないらしい。

そうする事によって首から下げるというアクションで対象を認識
させているため紐も魔具の一部という扱いになるらしい。

魔具としては結構ポピュラーな部類なので目立つこともないだろ
う。

まあさすがにジャラジャラとアクセサリーを付けたりしたくないが、
まあ場合によっては仕方ない、準備できるものは準備しておくのが

自分のやり方である。

よし、外も暗くなっ
たし今日は寝よう。

第二話 生活に慣れた生活（後書き）

・大樽

普通のデカイ樽だが、主人公の背よりもでかく主人公が丸まれば軽々三人はいるほどでかい。

・金平糖

砂糖菓子的一种で、大きな鍋に砂糖を敷き砂糖水をかけながら乾燥させころがしデコボコな球体にしたお菓子。綺麗に作るのは職人の技である。

・べっこう飴

水と砂糖で作るシンプルな飴。結構おいしいがほぼ百パーセント砂糖なので食べ過ぎると太るし体によくない。型にはめると色々な形にできる。

二話終了時点での主人公ステータス。

スキルでない自力での物作りは生産スキルには含まれません。

なお、祝福は無条件に詳細閲覧可能。

名称：ファイフィル・ファウ・フォリア 職名：ファイ

職業：初心者

転職可能職業：職業訓練生

L v . 9 9 / 9 9 E X P . 9 9 . 9 9 % N E X T : 2 7

称号一覧

「転生者」特級称号：システム権限により詳細閲覧不可

「神殿の隠れマスコット」民間称号：冒険者ギルド関係者からの称号

「技術屋」民間称号：一般民家からの称号

「ダンジョンの主」民間称号：冒険者からの称号

「エタールの人」民間称号：冒険者からの称号

<< 特殊技能一覧

>魔法：ステータス閲覧

- ・Lv・1 名前、職業、称号、本スキル詳細と技能一覧を閲覧可能
- ・Lv・2 状態、称号元、技能詳細、転職可能職業を閲覧可能
- ・Lv・3 レベル、現在経験値量、必要経験値量を閲覧可能
- ・Next-count 42355

>魔法：生命力回復補助

- ・Lv18 活力を回復可能、ただしカロリーを大幅に消費する。
- 効果一、一定時間生命力の上昇により傷の治りが早くなる。
- 効果二、一定時間気力などで動けなくなっても動けるようになる。

>魔法：肉体活性化

- ・Lv37 新陳代謝を向上させるがカロリーを大幅に消費する。
- 効果一、身体能力の上昇、傷を治す速度の上昇。
- 効果二、免疫力向上にとまなう解毒速度の上昇。

<<祝福一覧

>長命種の宿命

- ・成長速度干涉「低下補正」
- ・特殊技能干涉「成功率低下補正」
- ・生産スキル干涉「成功率低下補正」
- ・レベルアップ速度干涉「低下補正」
- ・レベルアップ時ステータス追加上昇
- ・転職制限「基本職の転職不可」

第三話 イベント発生（前書き）

とりあえず投げる。

いつになく早く次話が完成した。

文章評価 5 + 3 平均 4 結論：普通

ストーリー評価 5 + 4 平均 5 結論：まだまし

評価が嬉しいが、正直感想が欲しい。

第三話 イベント発生

朝が来た、きっと今日もいい日になるだろう。

適当だけどね？

まあ今まで兎の耳で運を上げてたところに兎の尻尾が加わって単純計算二倍運が良くなってるはずだからいい日になってくれないと困る。

まあまだ魔具化していないので尻尾の方は効果ないんだけどね。

一日あるものに付け込んで初めて幸運補正付きアクセサリになるのさ！

さて、話は変わるが前々から予定していた事だが今日は一日鍛冶を行う。

何を作るかって？

やっと必要量がそろったのだ。

そう、浴槽を作るだけの材料がなあ！

元日本人としては風呂は必須である！

誰が何と言おうと絶対である！

神が否定してもうちが否定させない！

ちなみにもう浴槽用の鋳型は作ってある。

形の関係上引き抜けないので使い捨てだが使うのも俺ぐらいなので問題ない。

材料が足りない日は必死にデザインと利便性を高める研究をしてやっとこの日が訪れたのだ。

それに、何よりもステンレスの材料がそろったのだ！

さすがに量までは覚えていないが大体一割とかそこらへんは勘で
どうにかなるだろう強度なんてあんまり関係ない。

なによりも普通の浴槽と違って馬鹿みたいに厚いしな！

一度形にすると再加工が恐ろしく難しいが、鑄型なら何の問題も
ないんだぜ！

材料は銅！　そしてそれなりの量を用意したクロム、ニッケル。
クロムとニッケルは両方で三割前後程度だったはずだ。

そして、世間一般からすればそれら二つは利用法がよくわからな
い屑金属として扱われるので買い取り出しても集まらないし本当に
苦労したよ！　マジで！

そついや配合の分配はクロムが少ない方だったけか？

まあ純粋な物質ばかりだし適当でもある程度あつてれば問題ない
だろうな。

いやあ祝福された鉍物つて純粋な鉍物が得られるから楽でいいわ
あ。

とりあえずクロム一割のニッケル二割ぐらいでいいか、どうせ過
熱部分以外は分厚くなるんだし問題ないはずだ。

なぜか生前の記憶が無駄に鮮明で助かった。

正直生前の記憶なんて時間と共に忘れるかと思っただが、生前
思い出せなかったようなことまで思い出せるのだ。

現在生きてきた記憶よりも生前の記憶の方が鮮明なのはやはりフ
アンタジーと割り切るしかない。

考えるだけ無駄である。

とりあえず溶かし終えしっかり混ぜ合わせたわけだがとにかく暑
い。

水飲みながらやってるが死ぬほど暑い。

魔力圧の鍋で溶かすとは言え、正直うちの五倍以上でかい鍋でお
立ち台に乗って専用の棒でかき回して料理するようなものである。

無論、一番暑いのは鍋から溶けた金属を出し鑄型に流し込む、金属が空気に触れ熱が逃げるその時である。

まあお爺ちゃんが無言で手伝ってくれるので一人でやるよりははるかに楽だ。

そして鑄型に必要な量を流し込み、上から浴槽の内側の空間になる部分の鑄型？ を押し付ける。

まあ両方とも軽石みたいなやつを削り出して作るんだけどね、馬鹿でかいその石を探すのには苦労しました。

無論両側に長い持ち手がついており直接接触するような事は無いし、一度下ろしてしまえば中に仕込んだ鉄の自重で安定してくれる。

一番思っただのはこの世界の物作りって便利でぬるいなという事である。

全てが全てではないが元の世界に比べて鍋で金属溶かすとかありえない事やるし魔法があるので昔ながらのやり方でも温度管理とか楽だし。

いや、無論風魔法で炭の温度調節ができるというだけで温度管理そのものは職人の技よ？

そんなこんなで浴槽「飯」が出来上がりました。

後は鑄型の部分を削りだしU字型の過熱用水道管を取り付ける上下の穴と排水用の穴をあけ、事前に作っておいたステンレスの水道管を取り付けるだけである。

無論内側と外側の鑄型となっていた石を削り落とした後、荒を砥石で削らなければ使い物にならないがそこらへんは一ヶ月もかければ問題なくできるだろう。

むしろ商店のおっちゃんに手伝ってもらえば三日でできる気がする。

こつこつ新しいもの好きだし喜んで手伝ってくれるだろう。

まあその場合は比較的手に入るアルミと何かの合金で作るだろうがうちには関係ない事だ。

もつかるのはお爺ちゃんなので何の問題もない。

え？ 転職はどうしたのだった？

そんなものより風呂である。

はい脳内会議煩い黙れ、メイン人格の強権をもってして意見は全却下である。

とりあえず頑張ってくれたお爺ちゃんには一番風呂を譲ってあげようと思う。

まあうちだけが使うわけじゃないのでかなりデカく作っているので三人ぐらいは余裕で入れると思うけどね。

ああ、事前に洗面器は作っておいたのさ！

ふははは、そこらへん抜かりはないのさ！

ああ、もちろんバスタオルと体洗うためのタオルの材質は別物ですよ。

へちまっぱい植物は探したんだが見つからなかった。

どうやらウリっぱい植物はあるもののあの見事な繊維が残るものは無いようなのである。

しかたないので体洗う方は目の粗い安いほうを用意しバスタオルは目の細かい柔らかい物を用意した。

なお、洗濯は無料で使わせる予定の神官さんたちに押し付ける予定である。

石鹸にシャンプー、リンスは存在する。

ただし、例の如くドロップ品なので無駄に高い貴族たちが使うものだけだな！！

まあ話によるととある神官さんが冒険者の一人に貢がれたらしいので分けてもらったが、頼めば結構分けてもらえそうである。

え？ うちを持ってないのだった？

別のダンジョンの特産らしくてうちのダンジョンじゃ出土しません、なぜか。

うちのダンジョンは食材系が特産らしい、まあいいんだけどね。

とりあえず必死こいて丸太とテコの原理で運んでいるのだがこれがまたキツイ。

商店までもつていくとミノのおやつさんが目を輝かせて出てきた。後ろでミノなお嫁さんが呆れてますが病気なので諦めて下さい。まあ戻ってきたら家族風呂作るだろうからそれで許してやってつかさい。

「あれか、これがお前さんの言ってた風呂か。それで俺は何をすればいいんだ？」

「無論荒削りで形を整えてうちが砥石で整える」

「とりあえず石で作るとは思わなかったな」

「いや石じゃないから。まあ削ってればわかるよ」

「こんなデカけりや俺でも入れるんじゃないか？」

「まあね。出来上がったら皆でまずはいるさ」

「お前さん、そのためだけにデカくしたのか？ デカくするのは大変だろうに」

「さすがに使うのはうちだけじゃないし何よりうちだっていつまでも小さいわけじゃないからね、とりあえず削ろう」

まあそんなわけで中のステンレスを削り出したわけだがおやつさんはビビっていた。

鋳型が使い捨てなのにビビっていたのか鋳型そのものに驚いたのかは知らないがかなり驚いていた。

普通風呂を金属で作るやつらはいないだろうからそれにビビったんだろうな。

まあそんなこんなで金属部分の取り出しに成功しここからは手動ドリルっぽい何かで必死に穴をあける作業だ。

ちなみに穴をあけるための魔具であるためステンレスなんて馬鹿硬いものでも穴をあけられる優れものだ。

魔法マンセーと叫びたい。

まあ効率はそれほどよくなく、どちらかと言えば使用者の力に依存する部分が多い道具である。

おやつさんは文字通り化け物レベルの力があるのでそこまでかからないようだが細かい作業が苦手だ。

結論だけ言うと自分は排水用の小さい穴を必死になって開け終わる頃には真夜中で、おやつさんの担当のU字管をぶっ刺すデカい上下の穴は普通に開け終わっていた。

ただし、大きい方の穴は予定していたよりも少し大きく穴が開いていた、結局つなぐためのコネクタを作る羽目になったが問題ない。

細かい隙間？

まあいつもの如くプニヨ玉とかして埋めましたよ。

それから内側の研磨に三日かかったがまあいい方だろう。

搬入は一度シャワー室の壁を壊す事になったが何の問題もない。その時の詳細はまあ後々という事で。

そして外側は木の枠で覆い内側はスノコのような板を底にあたるように固定する。

火傷が心配なのでお湯になって水が循環する穴のあたりには保護用に木枠を取り付けあまり近づけないようにし火傷防止のためにお湯をかき混ぜるためのオールモドキも置いておくようにした。

オールモドキをへんな木剣と馬鹿にされたのはいい思い出である。馬鹿にしたやつらは絶対風呂を使わせてやらん。

なお、排水口をふさぐ栓は例の如くプニヨ玉加工品である。プニヨ玉万能説が浮上しているが無視である。

さて、設置である。

だがその前に、今更だがうちの住処すまかを紹介しよう。

まず自身の部屋は物置も兼ねているため九畳ほどのスペースをと

っているが、半分以上は薬剤庫、残りのうちさらに半分は疑似ウオ
ーターベッドである。

他の仮眠室は一部屋が四畳半ほどのスペースを持っている。

自身の部屋も含め計九つの仮眠部屋がありその隣が倉庫兼用具庫
兼尋問室で、最後が排水の関係から最後になった九畳ほどのシャワ
ー室だ。

見た目は横長の長屋風である。

各仮眠部屋には四畳半ごとに一辺が三十センチほどの大きさの天
窓二つと同様の大きさの二枚一組の窓があり、簡易ではあるが窓に
鍵のようなものもついている。

天窓は明かりを取り込むための窓なので開かない。

なお、倉庫に窓はいらぬという独断と偏見により窓はついてい
ない。

ちなみに前作った鏡は最後のシャワー室に設置してある。

無論の事風呂は最後のシャワー室に設置する予定だ。

壁に馬鹿でかい穴をあけた時は神官の皆に白い眼で見られた。

別にこんな馬鹿でかい覗き穴を作ろうなんて馬鹿な事するわけな
いだろう！（混乱気味です）

まだ二次性徴前で興味よりも恥ずかしさの方が強いんだぞゴルア
リア充ぶつ殺す！

というかこんな馬鹿でかいと中に入っても丸見えだって、そ
んなのにはいる人いるわけないだろう！

さて、閑話休題はおいとこう。

U字型の配管部分を外に突き出す形で壁を修復し突き出した部
分に耐火煉瓦で、建物と間をあけて大きめの竈を作る。

ここで重要なのはU字になる部分がちょうど過熱部分になる事
である。

後、触ると危険なので基本的に管の部分は周りに耐火煉瓦を積ん
で触れないようにしておく。

さあショータイム！

え？ ショータイムは違ってます？

こまけえことはいいんだよ！

まず、事前に伸ばしていた水道から多量の水をなみなみと家族風呂？に注ぎます。

まああのタンクの中身じゃ全然足りないのだから必死に手漕ぎポンプをこぐわけですが誰も手伝ってくれません。

まあまた可哀そうな子供扱いなのでですね、わかります。

そして次に先ほど作った竈に火を起こす。

後は浴槽にお湯をかき回しに戻りながら火を絶やさなければいけないのでお爺ちゃんとおやつさんを呼んでもらう事にした。

ちなみに石鹼は敵ドロップのため高級品なので、そのうち実験して民間で作れるようにしよう。

確か油系を鹼化させる事で石鹼ができるんだっただか？

まあとにかく今は風呂である。

三人で体を洗ってから入ったわけだが。

「いやあ、労働後の風呂は最高だね。うち毎日入るわ」

「こりゃあ生き返るな。俺ん所でも作るう」

「確かに気持ちいいわい。ただわしはもう少し熱い方が好みだな」

一番風呂こそ至高、それは風呂好きにとって名言である。

誰が言ったかまでは知らないが。

自分は背が足りないので専用の椅子を持ち込んでいる。

後、さすがにミノさんはデカいだけあって胸までお湯が届かないが、自分のところで作る時は肩までつかれるものを作るだろう。

まあ後々の観察した結果から言うとミノさんは風呂場を一から作つたため三か月もかかったが、ミノタウロスみたいなデカイ方々でも入れるようないい風呂ができていた。

長時間温めるためにむこうは炭を使っていたが、自分は長風呂はあんまり入らないので薪で問題ない。

水が漏れなければ鋳型に使う石でも問題なくできるだろうと言ったらお爺ちゃんも作るって言った。

まあU字型の部分は火にかける関係上金属がいいと言ったらうちが試作で作って放置してあるものを使うと言っていた。

いやあ、一個大きく作りすぎたんだよね、ステンレスだから再加工も無駄に難しいし。

まあ重要なのは水が漏れない事と過熱部分とお湯をかき回す事だからね。

後、加熱中にかぶせておく蓋、これが温める時に重要である。

「いつもの事ながらお前さん突拍子もない物を作るな。まあ便利だからいいが」

「まあいつも事じゃて。わしの所に来た時はいきなり土下座から始まったぞい？」

「それは言わない約束でというやつだよ。でも風呂はやっぱいいなあ、入るまでがメンドクサイけど」

まあ誰が誰の台詞かは想像するまでもないと思うので明記しない。口調が独特だしね？

ああそうそう、お爺さんはドワーフみたいな種族で体が無駄に丈夫で器用なため鍛冶とか力のいる職人系が良く出る種族らしい。

そんなこんなで男性陣には好評な風呂だが、女性陣には美容効果があるとわかってからは順番待ちが並ぶほどになった。

まあ準備する関係上一番風呂は自分だが。

温めなおすなら燃料費が自費である事を除けば利用料金も安いと思う。

後お湯を使うようになった関係上、屋根の上に通気口を付けたのだが覗きに来て屋根から落ちる男が続出するとは思わなかった。

無論除き対策で屋根にはよく滑る油をぬつといたからなんだがそこからへんは裏話である。

そもそもあの通気口は中を覗けるようにできていないんだが、覗きに行ったやつらは他のやつに教えてやらないんだらうか。

せいぜい中の会話が聞こえる程度だし、屋根に上ればさすがに足音でバレルので屋根に上る馬鹿は結構すぐいなくなった。

男性陣の一部は落ちる馬鹿をニヤニヤしながら見ていたが女性陣にポッコポコにされてからは退散して影も見えなくなった。

まあいつの時代も女性には強いものだと思う。

ああそうそう、排水用の溝を除けば四畳半の大きさの風呂はちょっとデカく作りすぎたかもしれないと思わないでもない。

まあ多人数で使う以上作り始める時はこれぐらいが妥当だと思うのだ、入ってみるその時まで。

え？ 更衣室？ そんなもんはない。

基本馬鹿でかいバスタオルで体を覆おおって隣の尋問室で着替えているらしい。

その際尋問室に下着を盗みに入ろうものなら順番待ちの神官さんたちからそのまま尋問フルコースである。

たまに替えの服を忘れて手術着を借りに来るうっかりさんもいるがまた別の話である。

ただその手術着、少し透けるんだよなあ……。

自分は男だし自室が近いので特に気にしないがやはり女性は見られたくないのだろう、当たり前だが。

ちなみに浴槽の基礎部分を金属で作ったのは可能な限り全体の温度を均一にするためである。

まあそこそこの効果しかないんだが大きくなると端っこがいくらか冷たくなったりするし、そこは効果が認められてもいい部分だと思う。

正直現代のように燃料をバカス力使える時代ではないので女性陣

は燃料費を皆で出し合って入っているらしい。

まあ購入元はうちだが。

男性陣はお金を持つているやつらが入りに来る。

娼婦と一緒に入った馬鹿がいて神殿関係者に蹴り出されてた事もあったな、公共施設なので自重して下さいという話である。

まあ色々な人が入りに来るわけで一団体ごとにお湯が入れ替えられ掃除されていたためいつでもピッカピカなのは笑った。

なんか自分が磨いた後よりピッカピカなのは少し引いたが。

まあ公共施設としてこの四倍の広さを持つ風呂屋ができてからは利用客が神殿関係者で落ち着いたが。

公共施設の方が加熱に魔法使いを雇っているらしい。

基本的に魔法使いは研究職であり金欠なので結構な働き手がいるそつだ。

まあ男性側には男性、女性側には女性の魔法使いが個別に雇われるのには笑った。

正直透視魔法なんて音波探査を脳内で映像化するようなもので酷くボヤけた白黒映像しか見えないだろうにと思う。

いつの時代でも覗きは浪漫なのだろうか？　すくなくとも幼児化した今のうちにはわからん。

さらに笑ったのはお湯が汚れるので事前に体を洗ってこいという規則には本当に笑った。

風呂って体洗う施設だろうに、大爆笑である。

理由を話したら皆苦笑いしていたのは記憶に新しい。

どうにでもなーれって唱えて放置した自分は悪くないと思う。

まあそんなこんなでまたひと段落した。

この世界に来てからかなりの年月が経っている。

気がつけば童わらわの帝的意味みかどで魔法使いになっていた。

まあ未だに子供作れる体になってないだけだな。

そもそも生前合わせればとっくの昔に話だがまあ体が変われば年月はリセットでいいだろう。

まあそれはそれでいいと思う。

正直今考えると二次成長期来なくていいよと思う。

もったいないじゃない？　そういう事にかかる時間とか処理する労力とか謎の疲労感とか。

後あの白いのって無駄に栄養価高いらしく相手がいないと栄養捨ててるようなものだし。

まあそんな話はどうでもいいだろう。

問題なのは今更だが転職である。

闘技場でちょこつとモンスターぶつ殺してくればいいかなと思っただが、いきなり行っても迷惑だろうとやはりダンジョンにする事にした。

後に分かった事だが、いつのまにかブラックリストにのっけていて闘技場は一度も行かぬまま出入り禁止を食らってしまった。

やるせない話である。

さて、ダンジョンについたわけだが、とりあえずもうゼリーでは経験値が入らない。

今更な話だが、どうやらレベルに応じてもらえる経験値が引かれていくらしい。

とりあえず採取だけは忘れないのがファイフィルクオリティである。何せ鉱石系はいくらあっても足りないのである。

まあ採取以外はせず敵も倒さず走り抜けボス部屋へ到着したわけだが、何の冗談か子龍がいた。

あえて言おう、龍とは非常に強く凶暴で会話ができて話も通じず基本気に入らなければ相手をぶつ殺す生き物である。

たとえ子龍であろうとだ。

あれ、これつんだ？　ゲームオーバーですか？　いやいやこんな所に子龍とはいえ龍がいるわけがない。

という事で頭にある核を破壊するべく瞬足で接近し角剣を突き出した。

そこからは記憶があやふやだが、古龍に見えていたものが崩れて

黒い影のようなものになったのをつつすら覚えている。

「最悪だ」

目が覚めて一言目がそれであった。

今回の敵は通称シャドーといい別名ドツペルゲンガーだ。

一時期乱獲騒ぎがあつたが遭遇そのものが難しく、何よりもうわさが眉唾物だ。

本人に合つた神具級のアイテムをドロップするらしい、という噂。そして、本人の姿を真似て変身すると思考までコピーする。

つまりあそこには本当に今の今まで子龍がいたのであつてその強さになったドツペルゲンガーに突っ込んだらしい。

相手が油断していたのかは知らないが一発で核になる部分を破壊できたのは最高と言える幸運だつた。

正直別の生き物の形をまねて変身するゼリーの亜種、メタモル物真似師かと思つてたので命拾ひしたと言わざる負えない。

ただ、ドツペルゲンガーの最大にして最高の、有名になるべくしてなつた特徴が存在する。

それは姿を真似る事でも強さが上下する事でもない、ダメージの反射だ。

大抵の上級者になればなるほどこれで死ぬといわれるほど厄介な能力である。

ここがボス部屋だつたから良い物の通常のマップだつたらと思うと震えが止まらない、確実に死んでいただろう。

しかも、倒すと何らかの呪いを受けると言われている。

幸いにしてうちは最弱を誇る最下位職初心者であるため死ななかつた。

頭を一突きだったがダメージは昏倒するレベルだったらしい。
もうウサ耳とウサ尻尾サマサマである。

まあそれら二つがもたらすのは幸運であって悪運ではないがこの際どうでもいい。

そしてここは……、神殿？

しかしなぜ誰もいないんだ？

それにまるで、世界に誰もいないかのように恐ろしく静かで風の音すら聞こえない。

一体何があった？

とりあえず……、現状の確認か？

「こ、コールステータス」

自分の胸に手を当て魔法を唱える。

ちなみにターゲットの指定は昔から手のひらを向けるか指を向けるか杖を向けるかであるらしい。

伝統なのでみんなそうするが、実際に集中力が増す効果があるため実用になっっている。

ただ、特にそんなことしなくても問題ない場合もある。

このコール系魔法もその一つではあるが、混乱している自分はいくせでやってしまったのだろう。

そして頭の中に告げられる特殊魔法の成否判定。

「成功」

表示されるのは現在ステータスだ。

名称：ファイイル・ファウ・フォリア 職名：フィー

職業：職業訓練生

転職可能職業：商人「15」、調合師「15」、鍛冶師「15」、

術式使い「99」

Lv. 1 / 99 EXP. 0% NEXT: 50

称号一覧

「@*者」\$級# : システム権限により詳細閲覧不可

「限界突破体現者」特級称号 : システム権限により詳細閲覧不可

「先を歩む者」特級称号 : システム権限により詳細閲覧不可

<< 特殊技能一覧

> 魔法 : ステータス閲覧

・Lv. 1 名前、職業、称号、本スキル詳細と技能一覧を閲覧可能

・Lv. 2 状態、称号元、技能詳細、転職可能職業を閲覧可能

・Lv. 3 レベル、現在経験値量、必要経験値量を閲覧可能

・Next-count 42354

> 魔法 : 生命力回復補助

・Lv18 活力を回復可能、ただしカロリーを大幅に消費する。

効果一、一定時間生命力の上昇により傷の治りが早くなる。

効果二、一定時間気力などで動けなくなっても動けるようになる。

> 魔法 : 肉体活性化

・Lv37 新陳代謝を向上させるがカロリーを大幅に消費する。

効果一、身体能力の上昇、傷を治す速度の上昇。

効果二、免疫力向上にともなう解毒速度の上昇。

> 魔法 : 終わりの裁き

・Lv1 〓身及び一手の罪・重+によってダメージが変わる対、

魔法。

効果一、自身より相手の罪が重ければ二倍のダメージを与える。

効果二、自身が相手の罪より重ければ自身もダメージを受ける。

効果三、自身と相手の罪の重さが同じであれば三倍のダメージを与

える。

<< 祝福一覧

> 長命種の宿命

> 第一次限界突破者

> 自分殺しの宿命

> 呪い：シャドウハンド

- ・レベルアップ時ステータス追加上昇
- ・転職制限「基本職の転職不可」
- ・転職干涉「特殊職業解放」
- ・特殊干涉「肉体成長停止：十年」
- ・特殊干涉「レアドロップ率上昇」
- ・特殊干涉「固有モンスター遭遇率上昇」
- ・特殊干涉「固有スキル獲得」
- ・特殊干涉「再度一度ドツペルゲンガーを殺した時反射ダメージ二倍または二分の一」
- ・特殊干涉「次の転職までステータスの大部分を見れなくなる」

……ステータスが一部文字化けしている。

たぶんこれがドツペルゲンガーの呪いとやらなのだろう。

確かシャドウハンドと言ったか、ステータスの大部分を隠すものらしい。

それにしても少ししか文字化けしていないが、なぜだ？

まあ現状に問題ないならこの表示でも問題ないだろう。

文字化け部分もどうにか読み取れるし読み取られちゃまずいところがちょうど文字化けしたのは幸이었다。

せめて変更ログみたいなものがあればいろいろ状況がわかるのだがそんな便利なものはこの世界に存在しない。

それに、普通は一生を通して不変と言われる祝福がなぜか増えている。

しかも固有スキル？ いや平穩に暮らしたいのでいりません。

正直ドツペルゲンガーなんて会おうと思っただけで会える相手じゃないんですが。

それに増えた一つを除き全くマイナス補正消えてないか？ 転職制限残ってるけど。

まあ体が成長しないのはいい、今までだってそこまで変わらんかったし正直成長期に入ったには入ったがやはりゆっくりとしか成長しないし。

十年と言えば純種の人類換算で一年前後の時間に相当する。無論大体純種換算で二十歳ぐらいまででそこからは百年で一年換算ぐらいになるらしい。

なので正直何の問題もない。
今得るべき情報はこれぐらいだろうか？

民間称号が全部消えてしまったのは気になるが確かめようがないにしても終わりの裁きついていかにも聖書に出てきたりしそうな名前だな。

中二病臭くて嫌なんです。

まあ仕方ない、使わなければいいのだ。
ステータスを話すなんて結婚して下さいと告白するようなものらしいし問題ないだろう。

とりあえずまずは人を探すべきか。
確か神殿内では唯一人が一切いなくなることはない祭壇を目指す。ちなみに祭壇とは名ばかりで一番広い部屋の中央に机のようなものが置いてあり太陽と光を模した十字架のようなオブジェが飾られている場所だ。

基本的に教主や神官が祈りをささげる場所で、常に管理官として最低一人、最大で十人にも及ぶ人間が常時待機している。

元々は転職するための儀式場である地下への階段を隠しているのがこのテーブルで、転職を希望する物はここから地下へ降りるらしい……。

なのだが、開かなかった。
本当にどうなってるんだ。

最低でも五人で動かすものだからか？ まあ人がいないので一人

で動かすしかないのだが、レベルから言えば一人で動かせる程度の補正は受けてるはずなんだよな。

それがピクリとも動かない。

そもそも人がいないのもおかしい。

ここは常時人がいなければならぬと神殿側とギルド側が定めているのに、なのに誰もいない。

「主よ、ここは一体どこなのですか？」

ここでこれを言うのはお約束というやつである。

元の世界で言う「ここは誰？ 私はどこ？」というやつである。

とりあえずやることやったし各部屋を回るが誰もいない。

しかもユラユラと湯気を立てる飲み物が放置してあったり食べかけの食事が放置してあったりまるで人が消えてしまったかのような風景が広がっている。

どこかの幽霊船で同じような話を聞いた覚えがあるが、あれの落ちはなんだったか、そして誰もいなくなるだっけか？

正直怖い。

本当に何が起こっているのだろうか？

こういう不思議な現象の対処は勇者の仕事だろ？ サボらず解決しに来て下さい本当に。

第三話 イベント発生（後書き）

三話終了時点での主人公ステータス。
スキルでない自力での物作りは生産スキルには含まれません。
なお、祝福は無条件に詳細閲覧可能。

名称：ファイフィル・ファウ・フォリア 職名：ファイ

職業：職業訓練生

転職可能職業：商人「15」、調合師「15」、鍛冶師「15」、
術式使い「99」

LV・1/99 EXP・0% NEXT:50

称号一覧

「@*者」\$級#：システム権限により詳細閲覧不可

「限界突破現者」特級称号：システム権限により詳細閲覧不可

「先を歩む者」特級称号：システム権限により詳細閲覧不可

<<特殊技能一覧

>魔法：ステータス閲覧

・LV・1 名前、職業、称号、本スキル詳細と技能一覧を閲覧可能

・LV・2 状態、称号元、技能詳細、転職可能職業を閲覧可能

・LV・3 レベル、現在経験値量、必要経験値量を閲覧可能

・Next-count 42354

>魔法：生命力回復補助

・LV18 活力を回復可能、ただしカロリーを大幅に消費する。

効果一、一定時間生命力の上昇により傷の治りが早くなる。

効果二、一定時間気力などで動けなくなっても動けるようになる。

>魔法：肉体活性化

・LV37 新陳代謝を向上させるがカロリーを大幅に消費する。

効果一、身体能力の上昇、傷を治す速度の上昇。

効果二、免疫力向上にとまなう解毒速度の上昇。

>魔法：終わりの裁き

・Lv1 Ⅱ身及び一手の罪・重+によってダメ「ジが変わる対魔法。

効果一、自身より相手の罪が重ければ二倍のダメージを与える。

効果二、自身が相手の罪より重ければ自身もダメージを受ける。

効果三、自身と相手の罪の重さが同じであれば三倍のダメージを与える。

<<祝福一覧

>長命種の宿命

>第一次限界突破者

>自分殺しの宿命

>呪い：シャドウハンド

・レベルアップ時ステータス追加上昇

・転職制限「基本職の転職不可」

・転職干涉「特殊職業解放」

・特殊干涉「肉体成長停止：十年」

・特殊干涉「レアドロップ率上昇」

・特殊干涉「固有モンスター遭遇率上昇」

・特殊干涉「固有スキル獲得」

・特殊干涉「再度一度ドツペルゲンを殺した時反射ダメージ二倍または二分の一」

・特殊干涉「次の転職までステータスの大部分を見れなくなる」

第四話 逃亡潜伏独り立ち（前書き）

ダンジョンの成長？ ダンジョン攻略？ すみませんもう少しだけ待って下さい。

大体独立が終わって神殿と仲直りしたあたりからやるつもりです。

だが最後に一言だけ言い訳を……。

ふははは、ファイルの技術は世界一いいいいいい！！！！

第四話 逃亡潜伏独り立ち

あれから十年に及ぶ年月が……、たたねーよ（笑）

そもそもそんな長持ちする食べ物がないわけで、どうにもならないなら早急に脱出しダンジョンやらどこやらで食糧を確保しなければならぬ。

そもそもなぜ誰もいない？

神殿内は何処を探しても人つ子一人いない。

外は外で、まるで切り取ったかのように真っ暗で何も見えない。外に出るのは危険そうなので一切出ていないが一体どうなっているのだろうか？

とりあえず探索して色々なものを集めたが初めて見るものは目の前にあるシンボルだけである。

神殿の壁にデカデカと彫刻されているあのシンボルである。

見つけたのはそう、全部屋をチェックし終わって祭壇に戻った時だ。

祭壇の上に置いてあるオブジェがキラキラと光の粉のようなものを纏っていたのだ。

なんというか、この部屋に最初に着た時も光ってた気がするけど太陽光に何かが反射してたんだろうと思っていた。

良く考えたら外は暗いの中は明るくどこが光源で光を取り入れているのかさっぱりわからない。

影すらできない。

そんな中で光を放つ？ シンボルのオブジェに疑問を抱いて調べてみれば首飾りのようなシンボルがかかっていた。

もうね、ちょうどアクセサリーじみた大きさの首飾りで、あれか

神官の忘れ物かと思ったほどだ。

しかしそれにしては教主や神官の人がこれをつけているのを見た事がない。

そもそも神殿のシンボルにひっかけておくなど絶対怒られてとられる。

ということとは、元々あったものではないのかもしれない。

とりあえず持って帰ろう、何かの手掛かりになるかもしれないしというのが今までの流れである。

本当にうちは何に巻き込まれたんだらう？

↳ 転職イベント開催中？ 一体ここはどこ巻

そういえば職業が初心者から職業訓練生に変わっていたな。

実際転職した覚えもないしバグでも発生したのだろうか？

そういえば「Error no. 001」という謎の黒い球体がアイテムとして追加されていた、背負っていたリュックに。

もしかして初心者が限界値に到達するのは想定外なのかもしれない。

この世界にこんなシステムを作ったのは誰か知らないがえらい手抜き具合である。

もしかして職業訓練生も……？

いや、限界レベルが転職条件にある職業があったからそれは違うだろう。

そうになると初心者も違うのでは？

そういえばドッペルゲンガーの経験値って聞いた事ないな、攻撃した人って基本死んでるし。

まあ死んだ直後、大体五分以内で欠損が少なければ蘇生魔法で息を吹き返す事があるのでドッペルゲンガーの情報が出回っているわけだが。

もしかしてあれか、うちが死ななかつたからバグったのか？

まさかバグのせいで呪いが正常作動していないからステータスのほとんどが見えるのか？

そもそもが死亡前提で全部組んであるって事なのか！！？

いやまて作成者、勝利イコール死亡で結ばれるモンスターってなんなのさ本当に。

そんなモンスターいたらそのゲームは間違いなくクソゲーに分類されるぞ、本当に間違いなく。

まあステータスが見れる分には問題あるまいと結論を出して考えるのをやめる。

正直考えたって何も変わらないのだから他のことをするべきだ。

なにせ外に出る事が出来れば時間はできる、考えるのはそれからでも遅くない。

大体本当に今の状況は一体全体なんなんだろう？

とりあえず状況をまとめよう。

- ・ 謎のアイテム コール魔法で鑑定かけても詳細が表示されず。
- ・ 誰もいない神殿 一応気配もないので本当に人がいないのだろう。

- ・ 外の存在しないような闇に覆われた外界 本を投げてみたら音は帰ってきたので外がないわけではないらしい。

- ・ 謎のシンボル 詳細不明、コール魔法も反応なし
- ・ 不思議な強制転職 詳細不明、履歴がないので確認のしようがない

うん、一切共通点がないね

もう死ねばいいのに。

いつその事あの真っ黒い外へ突っ込んでみるか？

まあそれは最終手段だな。

さらに調べる。

部屋の隅々まで不審なものがないか調べ、新たに隠し通路や部屋が増えていないか調べ、そして手がかりがあるかもしれない書籍を……。

なんだこれは!?

なんというか、普通の文字から記号、挿絵にいたるまで全部鏡文字、左右反対になっていた。

一つ見つければ出るわ出るわ不審な点。

良く調べれば本来の配置とは左右反対になった小物や部屋の間取りに家具の配置。

神殿が中央から左右対称になっていたので気づくのが遅れたがほぼすべてが左右反対になっていた。

本当にここは何処だ?

少なくともうちの知っている神殿ではない事、それが確かな事だ。まるで、自分の知っている神殿を鏡の世界に写し取ったような場所だ。

ただ怖い。

無音で怖い。

生命がなく怖い。

ここにるのが怖い。

何よりも未知の恐怖が怖い

怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い
ワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコ

外に出よう。

ここはヤバイ。

現実世界でありながら別世界だ。

このままここにいれば精神が壊れる。

危険、本能が恐怖という形で警告を送る。

ここはどこだ? 知っているようで知らば居場所だ。

うちはだれだ？　うちはうち、フィフィールである。
なぜここにいる？　わからない。
だれがつれてきた？　わからない。
なんのもくてきで？　わからない。
どうするつもりだ？　わからない。
わからないわからないわからないわからない。
とにかく逃げ出そう、ここにいてはいけない。
とりあえず神殿の出口付近まで走る。
そこからはさつき拾った棒で外に地面がある事を確認し。

「セーのっ！」

目をつぶって飛び出した。

背後で、何かが割れて、崩れ落ちる音がした。

目を開ければいつもの宝箱の間だった。

そつえば気を失う前はボス部屋で室内にタダ一匹のモンスターを倒したんだからここに出るのが正常である。

帰ってきた。

安心して力が抜けて座り込んでしまう。

とりあえず、もう安心だ。

地上に帰って美味しい物でも食べよう。

とりあえず宝箱をあける。

今回は言っていたのは前回と同じ一角獣の角だった。

外に転送されると町が騒がしい。

正確にはすぐ近くにある神殿が騒がしいのだろう。

教主が走り神官が走り巫女さんが走り……、巫女さん？

いや気のせいだったみたいだ。

冒険者が走りお祈りに来ていた町の住人が走りペットだろうか？
犬が走り虎が走りせわしなく出入りしている。

……？　なんか違和感があったが問題ない、気にしたら負けだ。

まあ自分は自宅に　　ガシッと音がするほどしっかりつかまれた。

「探していましたよフィー殿。少しお時間をいただきますね？」

それは最早お願いではなく通告だった。

「今度は一体何してくれやがったんでしょか？　いい加減落ち着いて下さいませんか？」

大神官どころか周囲の神官たちの笑顔ですら怖い。

目が笑ってない、目が笑ってない！

女の笑顔が怖いなんて嫁の貰い手が

「何か？」

「イイエナニモ」

なんで女性ってこんな時に限って鋭いんだろっね？

そしてドナドナのごとく引きずられていくのだった。

放り込まれた尋問室は真っ暗で光一つない。

覗き対策のために神官のみなさんが頑張った結果である。

しかしなぜランプを付けないのだろうか？

目の前に小さい赤い光が見える。

甘い匂いって事は香でも焚かれているのか？

ドンと、机を叩く音がした。

「では、話してもらいましょう。今まであなたは何処で何をしていますか？」

「ダンジョンに潜ってましたですハイもう本当に！」

「何か、変わった事はありませんでしたか？」

「固有モンスターのシャドーがボスだった事ぐらいで特には」

「倒したのですか？」

「核を一撃で破壊し倒しましたですハイ」

「それだけですか？」

「いやあの

そこからは記憶が曖昧だ。

色々な事を聞かれた気がするがほとんど覚えていない。

何か甘い香りを嗅いだような気がした。

確か判断力を低下させる自白剤系の薬の匂いだった気がするが良く覚えていないので判断のしようがない。

まあここらへんで作れる自白剤系っていったら一つしかないのであれで間違いないだろう。

あれには弱点があって、絶対に話したくない事はどう頑張っても効きだせないのだ。

話したくない事があるかどうかは分かっても中身を聞き出せなければ自白剤として意味ないと思うのだが、そこらへんは質問する側の技量だろう。

まあ自分の場合話と命に係わる事が結構あるのでダメなものはダメと言っただろうと思う。

そもそも、そんなものまで使って何を聞き出そうというのだろうかと言うのがうちの感想である。

一体全体マジで本当に何があったんだろう？

気がつけば自分の部屋で寝ていてドロップ品の仕分けも終わっていた。

結論から言えば、いつもの如くオババサマもとい大神官は怖い、という事だろう。

一三日部屋を出ずにひきこもろう、そうしようそうしよう。

食料も水も十分あるので問題ない。

ちよっと人間不信になりつつあるしちよっどいいガス抜きになるだろう。

とりあえず窓をふさいで換気口をあけてランプをつける。
無論扉もあかないようにしておく。
ちよつど作りたいものもあつたので問題ない。

一日目前半は腐るほどあつた角兎の角を削つてお箸を三つ作る。
一日目後半は同じ材料で箸置きを三つ作る。

二日目前半は同じ材料でスプーンを三つ作る。
二日目後半は同じ材料でフォークを三つ作る。

三日目前半は同じ材料でナイフを三つ作る。
三日目後半は同じ材料で必死こいて一本ストローを作つてみた。
ちなみに三つ作ったものうち一つはミノさんようにデカく作つて
ある。

四日目に入つて寝た。
もう二十四時間ほど。

五日目に入つてそういえば熟成がそろそろ終わるなと確認と調合
を行う。

正直麻酔薬系は調合に神経を使うので丸々一日かかった。

六日目に入つてほとんど食事をとっていない事に気づいた。
とりあえず干し肉と果実水（ただし冷凍済み）でお腹を満たした。
確か魔法薬系も出来上がったはずなので濃度別に刻印を掘る作業
を行った。

七日目、一日怠けていた。

八日目、一日怠けていた。

九日目、一日怠けていた。

十日目になって充電が終わった、さあ掃除でもしようかと思っただけで水道が出なかった。

メンテナンスしてなかったからポンプが凍りついたんだろうな。

まあ貯め水があるので何の問題もない。

実はこの部屋だけ秘密の地下倉庫があり実は籠城戦の備えが終わっていたりする。

この部屋そこらかしこに触った痕跡が残っていたが地下倉庫はばれなかったようだ。

まあわざわざ床板剥がすような馬鹿がいなかったただけだろう。

ついでだから地下倉庫も整理してしまおう。

まあほとんど保存食と魔法で凍らせた果実水とか水とかなんだけどね。

大きい物が入らないから困る。

十一日目、誰かが物凄い勢いでノックしていたようだが無視した。籠城戦の備えは伊達ではない。

実はこの自室だけ壁やら柱やら枠やらに金属がこっさり使われており破壊するのはちよつとやさつとじゃ難しいのだ。

疑似鉄筋コンクリートと言っても過言ではない。

さらに防音も行っている。

時々薬の調合で魔法薬系は爆発したりするし。

まあいいや。

そういえば地下倉庫も狭くなってきたし地下二階の倉庫を作るか。ああ、ちなみに壁は魔法薬で固めてあるのでちよつとやさつとじゃ崩れないのだ。

それこそ百人乗ってもうんたらという話である。

二十日目にして地下倉庫第二室ができあがった。

さすがに梯子は用意してなかったのでヒモで上り下りしなければ

ならないが。

地下二層は水分系を補完する事にしよう。

んー、むしろこのまま井戸を掘るべきか？

よし掘ろうそうしよう。

ちなみに掘った土は魔法薬モドキで溶かして壁の補強材になっている。

ちなみにこの素材は本当に危険なので公開していない。

元はセメントを作ろうと思って頑張っていたのだが、某アニメの硬化なんちゃらかいこのに似たものができた。

地下倉庫行きの見せてはいけない謎技術作品第一号がこれである。

これを硬化剤と名付けたが、これって正直瞬間接着剤の速乾性とセメント並みの汎用性があるチートアイテムな気がするんだ。

保存用のしつかり蓋をした瓶に入れている間は液体なのだが、三分ほど空気に触れるとその部分から徐々に固まり鋼鉄並みの強度になるのだ。

正直割れやすい瓶に入れ投げつければ場合によっては相手を殺せるし油みたいに水の上を広がるので水源をふさいでしまう事すらできるのだ。

量さえ揃えればあまりに危険な戦略兵器である。

まあ一応溶解剤はあるのだが、専用の溶解剤でもない限りなぜか溶けないし失敗した時が一番困る。

まあ食べても体に害がない事がせめてもの救いだろう。

便秘になるだろうが。

原液がぶ飲みなんて馬鹿な真似をした場合は保証できないがそんな馬鹿はまずいないだろうし。

そういえば控えめのノックが何回かあったが忙しかったせいで無視しちゃったな、まあいいか。

ふとステータスを見たらレベルが上がっていた。

そういえば職業訓練生は何か仕事をしていると経験値が入るんだっけか、スズメの涙ほどだけ。

それでレベルが十上がるとか馬鹿じゃないのと言われるかもしれないが、初期レベルなんてそんなもんである。

井戸が完成してからは三日ほどダレていた。

そういや三日のつもりで一ヶ月ほど引きこもってるな。

まあどうでもいいか、引きこもりマンセー。

いつそ地下帝国でも作るか？ どこかの髭親父的土管帝国な感じ
で。

いやどこの忍者屋敷だよそれ。

……忍者屋敷？ それいいな！

よし隠し通路と隠し扉作ろう！

確か家の裏手は三十センチほど間をあけてあるから出られるように
できるはずだ。

隠し通路はどうしようかな？ 地下通路なのは決定としてどこま
で伸ばすべきか。

まあとりあえず隠し扉の方である。

とりあえず地上に戻って疑似ウォーターベッドを立ててどかし壁
にこっそり静かに穴をあけ一番外層の木の壁を隠し扉に改造し普段
は見つからないように硬化剤で石のふたを作った。

外から見てもばれないだろうしわざわざこんな場所を見に来るや
つもないだろう、隠し扉としては合格の域なんじゃないだろうか？

まあ次は隠し通路だがさすがにお腹減ったなあ。

まあまた干し肉でいいか。

ゆでて冷凍していた野菜に凍らせておいたドレッシングかけて食
べたが、結構時間がたってもいけるな。

ちなみに冷蔵庫は存在しない。

存在しないが似たような魔法で室内を疑似冷凍庫にできるので問
題ない。

まあ結構小さな範囲だけなのだが、まあこんな事はどうでもいい

だろう。

地下二階の壁を掘り進めながら硬化剤にしていく。

そろそろため込んだ液体魔力が半分を切るのだが大丈夫だろうか？
まあ硬化剤を作るのに液体魔力ーに対し必要な土が千ぐらい必要だから問題ないのだが。

というか質量保存の法則どこ行った？ ファンタジーすぎるよさすがに。

そんなこんなで掘る事自体が楽しくなってきた頃ふと思い出した。
何処につなげるんだっけか？

そろそろ地上へ向けて斜めに掘ろう。

そういえば何気なく干し肉食いまくってたけどそろそろ備蓄がヤバいな、地上に出たら買い出しに出るか。

そんなこんなで掘っては掘って掘りまくる。

えいさ、ほいさ、どっこいしょ。

掘っては掘って掘りまくる。

えいさ、ほいさ、どっこいしょ。

掘っては掘って掘りまくる。

えいさ、ほいさ、どっこいしょ。

掘っては掘って掘りまくる……、おや外だ。

うぬ？ 森の中？

なんか見た覚えが……、ってここは元々小屋を建てる予定だった
建設予定地じゃん。

という事は町の外なのかこっつて、無駄に掘ったなあ。

まあいいや、水が振り込んでも困るから小さな小屋作っておこう。
なんかちよつと臭ったので久しぶりに川へ体を洗いにいった。
とりあえず買い出しだ。

そのまえにちよつと神殿を覗いてくるか。

どうせだからこっそり町の中に戻りこっそり移動する。

さて、よくわかんないけどどうなってるか……。

何これ？

なんで仮眠室がデカくなって二階建てになってるのさ。
しかもなんかうちの部屋の前に見張りが立ってるんですが。
俺って何かしたっけ？

引きこもってただけだよな？

なぜか見つかったらヤバい気がする。

とりあえず逃げよう。

もう少し籠城戦を続けよう、よろしいならば食料だ！

商店まで移動した。

たぶん見つかってないと思う。

だから、こっそり背後に近づいて元気に声をかけるだ。

「おつちゃん肉くれー！」

「うお！？ なんだお前さんか。一ヶ月音沙汰がないから心配したぞ」

「いやあ小屋の改造に夢中になって気がついたら一ヶ月たってたんだよね。時計がなかったら時間にも気づかなかったぐらいだよ」

「なんつうか、いつもの通りぶつとんでやがんなあ。ああそうだし最近こっちでも湯船つつたか？ 出来上がったんで見てくれよ」

「ほほう、うちの裁定は厳しいですよ？」

「いやそれ誰キャラだよお前さん、まあこっちだ」

「ういいういよー」

結論から言おう。

湯船が無駄にデカかった。

まあミノなのでスケールがデカイのはしょうがない。

なんと更衣室完備であった。

まあうちが愚痴漏らしてたから必要なものなんだと認識したんだろ。

うちの開発した冷蔵、冷凍魔法で湯上りのコーヒー牛乳も完備であつた。

正直言おう、負けた。

「き、貴様あああああ！ わかつてんじゃねえか。さすがだぜ百点満点だおやつさん」

「おうよ、食品系ならお前さんにも負けないぜ！ もうこれが出来上がってからエミィのサービスが過激になつてな」

判明する嫁さんの名前。

これまではうちの嫁がなつて言うから名前知らなかつたんだよな、そういえば。

「はいはい惚気惚気」

「まあ凄く感謝してたよ。うちの種族の女なら誰でも悩む慢性的な肩こりがかなり楽になつたらしいんだよ」

それはチチが無駄にでかいからです、重いから仕方ないのです。

「ああそういえばお風呂の効果つて言つてなかつたつけ。他にも疲れが取れたり毛穴の老廃物が取れたり色々健康にいいんだよ？」

「おう、ますます綺麗になつちまつて仲間内で呪い殺されるかと思つたよ」

「リア充のおつちゃんも苦労してるなあ」

「そのりあじゅうつてのが良くわからんが、良いのは良いなりの悪いのは悪いなりの苦労があるからな」

まあ世の中そんなもんである。

「そこまでわかつて人とミノのハーフがあんなモテモテな理由も

理解できないのか」

「そこらへんはさっぱりだ。俺らミノタウロスは外見じゃなくて中身で相手を選ぶからな、人間とは判断基準が違うだろうよ。まあ男にその権利がないのは少しさみしいが」

つまり彼、ミノのおやつさんは勝ち組である。

綺麗な嫁さんを惚れさせた勝ち組である。

惚れたが負け、惚れた側は一方的に譲歩するしかないのである。

なんで趣味人のおっちゃんか村一番綺麗と言われている人を嫁さんにできたかね？

本当に不思議だ。

まあいいや。

「それで肉はどれぐらい入荷したのさ？」

「いきなり話題変えたな。まあ七十ぐらいか？ 干し肉は日持ちするし冷蔵すればさらに持つしな」

「そりゃあね。じゃあ五十ほどもらうよ。こもってるうちにかなり食べちゃってさ」

「なら冷凍野菜ももってくか？ あれはあんまり人気ないんだが冬でも夏の野菜が食べられるところがいいな」

「じゃあそれも頼むー。全部でいくら？」

「大体七百八十四エクってところか？ 八百エクでいいですぜゲへ」

「いや誰だよしかも増えてんじゃん。どうせ九百前後っしょ？ はい八百エク」

「お前さんもだいたい商品の値段覚えてきたな」

「知らん奴に詐欺られたくないからね。ああさすがに量が量だから台車借りてくね」

「おうよ、明日の朝には返しに来いよ？」

「わかってるって」

かなりの量の荷物が台車に積まれ町の外に運び出された。
きつと噂になってるに違いない。

認識障害もとい白霧のヴェールという魔法（ただしその魔法を使えるアイテム）を使ったので誰かまではばれてないだろう。

まあ必死に運び込んだら夜になってました。

まあ特に予定もないし問題ないだろうな。

なんか監視されてるし出にくくなっちゃったなあ、どうしようか？
いつそ森の方に別宅ならぬ本宅作ってそっちに移住するか？

なんか裏切ったから裏切ったんだ臭くするために色を反転させた
ような神官服作るか？

うちが怒られてばっかだけどたまにはあっちにも反省してもらおう。

何せ今まで何か作ってる最中怒られることはあっても褒められることはなかったし、完成してから感謝されても褒められた覚えなし。

いくら子供っぽくないとはいえ一応子供なのになあ、子育ての方
法間違ってる臭いよ！

よしそうしようそうしよう。

～そんなわけで移住中の日々～

一日目、まず地下への穴を広げて必死こいて部屋の中の道具やら
アイテムを退避する。

二日目、穴を硬化剤で念入りに塞いで地下への通路を閉じる。

三日目、森の方にまともな小屋を建てよう。

嗚呼いつそ鉄筋コンクリートにするか！ まあ実質鉄筋硬化剤な

んだが、ってことは材料が足りないなあ。

四日目、こっそりダンジョンに侵入し材料を必死こいて集める。
最早時間との闘いである。

五日目、こっそりお爺ちゃんところに鉄筋の作成を依頼する。

六日目、建設用に板材を用意し家の骨組み部分を作る。
ミノさんたちが遊びに来るかもしれないので大きめに。

七日目、鉄筋が届いたがまだ足りない、とりあえず硬化剤を量産
するがどこから土をとるか。

まあばれないように地下から取るしかなく、崩落しないように硬
化剤を使わなければいけない悪循環。

しかし少しずつ溜まってきた。

八日目、一日硬化剤を作っていた。

九日目、一日硬化剤を作っていた。

十日目、気づくと地下に巨大な倉庫が出来ていた。

硬化剤はこれぐらいで十分だろう。

十一日目、鉄筋が必要量届いた、必死こいて網目状にして壁にな
る部分に設置していく。

十二日目、よく考えたら天井の敷板を支える棒を用意していなか
ったので森の奥へ必死に切り出しに行く。

十三日目、ようやく建物の形になってきた。

ふと思ったが強度十分だから二階建てでもよくねえ？

十四日目、天井まで完成して硬化剤を流し込む。
さすがに一気には固まらないだろうから一階部分の完成には一ヶ月ほどかかるとみている。

十五日目、さらに鉄筋を注文する。
食料を買い足したがそろそろ白霧が足りなくなってきた。
後町にお化けのうわさが立ち始めたが気にしない気にしない。

十六日目、一応家具を作り始めた。
ベッドは組み立てるだけだったが結構かかるんだねえ。

十七日目、浴槽も硬化剤で作ったが想像以上に保温効果があるので一人用ならこれで十分だろう。
とりあえず硬化剤で全部作る事にした。
問題は今まで使っていた洗面器やらが全部むこうにあるので回収が不可能という事だろう。

十八日目、硬化剤がさすがに足りなくなった、しかしこれ以上の地下からは取りたくない……。

そつだ地下道を掘ろう！
確かおやつさんが倉庫欲しい倉庫欲しいってばやいてたな。

掘って掘りまくる〜

えいさ、ほいさ、どっこいしょ。

掘っては掘って掘りまくる〜

えいさ、ほいさ、どっこいしょ。

掘っては掘って掘りまくる〜

えいさ、ほいさ、どっこいしょ。

掘って……、そろそろ目的地か？

「コールヴィジョン」

「成功」

使ったのは透視魔法。

まあこんな地下からじゃうつすらとしか見えないが位置を確認する分にはこれで十分だ。

よし、ちょうど商店の隣の空き地まで掘れた。

ここなら崩落しても商店に被害は出ない。

まあ崩落させる気なんてないが。

十九日目、一日中硬化剤を作る。

二十日目、さすがに硬化剤の材料が切れた。

こつそりダンジョンに潜ったが危うく見つかるところだった。材料の確保成功、でもってやはり残りの時間硬化剤を作る。

二十一日目、硬化剤を作る。

二十二日目、硬化剤を作る。

二十三日目、地下倉庫が完成したので硬化剤を作りつつ商店側へ階段を掘る。

二十四日目、階段を掘る。

二十五日目、階段を抜けて床板が見えた。

後はミノさんたちの大きさに合わせて穴を大きくし固めるだけである。

なお天井はすでに固めてあるので横長の穴になってしまっているが、まあ後は背の高さまで掘って階段の形にするだけなので問題ない。

二十六日目、さすがに食料が尽きたので買い出しに。床下から戻ってまた商店に行くってなんか間抜けだな。

二十七日目、階段が完成したのと同じくして硬化剤も必要量確保できた。

そういえばこの硬化剤、作った当時は片腕が固まって酷い目に合ったんだよな、溶解剤は溶かす時に熱に熱を出すから大火傷したし。あれ、組み合わせたらホットカイロ作れるんじゃない？
まあ今度作ってみよう。

そして、夜中にこつそり分厚い床に穴をあける。

翌日起きたら床がなくなって謎の階段が！ その先には巨大な空間がアーラ不思議って一発で俺だつてばれますね。

まあ一月ぐらいはしらばっくれよう。

ここまで掘った地下道の入口をしつかり塞ぐ。

二十八日目、食べ物を買いに行きました。

え？ 資金は尽きないのかって？ 自分回収速度が半端ないので昔こそ貧乏だったけど結構な貯金があるのですよ。

そんなわけで商店です。

「お前さんだろ」

「……いや、何が？」

「絶対お前さんだろ」

「だから何がさ」

「お前さん以外にあんなことできる奴いねえから」

「だから本当に何がさ」

暫くエンドレスのためキャツキャウフフなベリーゼリーダンスを
ご想像下さい。

ループ中です。
ループ中です。
ループ中です。
ループが終わりました。

「とりあえずいつものお肉とお野菜で」
「十五エクでいい。やっぱお前さんだろ」
「だから何がだよ、いい加減怒るよ？」
「もういい、どうせお前さんだからな」

……バレバレですねわかります。
そんなこんなで食料を確保しました。
さあ改築だやれ改築だそれ改築だ二階建設セットアップ

二十八日目、うん、昨日は徹夜明けのハイテンションだったんだ。
決して普段のうちがあんな壊れているわけじゃないんだ。
お願いだから信じてほしい。

まあとにかく二階の骨組みを作り届いた鉄筋の代金を払い硬化剤
を流し込む。

イ。
構造の関係上屋根は最後に作らなければならないのがメンドクサ

ちなみに今回はドアから門かんばんにいたるまで全て鉄筋硬化剤製だ。
それこそ元の世界の対戦車ミサイルでも打ち込まれない限り壊れ
る事は無いだろう。

二十九日目、固まるのを待っている間ダンジョン攻略にいそし
みます。
足りなくなつた材料を補充中。

三十日目、足りなくなつた材料をダンジョンで補充中。

三十一日目、どうやらうち幽霊になっているらしい。
無論噂の上でだが。

そりゃあびびるよね、あまりに出てこないのだから突入したら部屋の中にも何もないんだから。

ついには泣いちゃう人まで出たらしい。

そして、ふと思いついたんだ。

地底湖って浪漫があるよね

三十二日目、硬化剤で鍾乳石の作り方を研究中。

三十三日目、硬化剤で鍾乳洞の作り方を研究中。

三十四日目、硬化剤で地上へのルートを作成中です。

三十五日目、硬化剤で地上へのルートを作成完了。

荒野に地下への洞窟が出来上がりました。

三十六日目、馬鹿でかい空間を作るべく掘削中です。

三十七日目、馬鹿でかい空間を作るべく掘削中です。

三十八日目、馬鹿でかい空間を作るべく掘削中です。

三十九日目、馬鹿でかい空間を作るべく掘削中です。

四十日目、大失策です、天井から水がしみ出してきました。

どうやら鍾乳系の作り方は小さな隙間がいっぱいあくらしく雨が降ることに中でも雨が降るようになってしまった。

まあそんなの目じゃないくらい空間は広くなったんだが……、なんでうちこんなことしてるんだらう？

四十一日目、大体東京ドーム？ とやらと比較できるぐらいの地底湖が完成した。

正直使い道がない。

第四話 逃亡潜伏独り立ち（後書き）

四話終了時点での主人公ステータス。
スキルでない自力での物作りは生産スキルには含まれません。
なお、祝福は無条件に詳細閲覧可能。

名称：ファイフィル・ファウ・フォリア 職名：ファイ

職業：職業訓練生

転職可能職業：商人「15」、調合師「15」、鍛冶師「15」、
術式使い「99」

LV・45/99 EXP・22.01% NEXT:85367
称号一覧

「@*者」\$級#：システム権限により詳細閲覧不可

「限界突破現者」特級称号：システム権限により詳細閲覧不可

「先を歩む者」特級称号：システム権限により詳細閲覧不可

<<特殊技能一覧

>魔法：ステータス閲覧

・LV・1 名前、職業、称号、本スキル詳細と技能一覧を閲覧可能

・LV・2 状態、称号元、技能詳細、転職可能職業を閲覧可能

・LV・3 レベル、現在経験値量、必要経験値量を閲覧可能

・Next-count 42350

>魔法：生命力回復補助

・LV18 活力を回復可能、ただしカロリーを大幅に消費する。

効果一、一定時間生命力の上昇により傷の治りが早くなる。

効果二、一定時間気力などで動けなくなっても動けるようになる。

>魔法：肉体活性化

・LV37 新陳代謝を向上させるがカロリーを大幅に消費する。

効果一、身体能力の上昇、傷を治す速度の上昇。

効果二、免疫力向上にとまなう解毒速度の上昇。

> 魔法：終わりの裁き

・Lv1 「身及び一手の罪・重+によってダメ」ジが変わる対魔法。

効果一、自身より相手の罪が重ければ二倍のダメージを与える。

効果二、自身が相手の罪より重ければ自身もダメージを受ける。

効果三、自身と相手の罪の重さが同じであれば三倍のダメージを与える。

<< 祝福一覧

> 長命種の宿命

> 第一次限界突破者

> 自分殺しの宿命

> 呪い：シャドウハンド

・レベルアップ時ステータス追加上昇

・転職制限「基本職の転職不可」

・転職干涉「特殊職業解放」

・特殊干涉「肉体成長停止：十年」

・特殊干涉「レアドロップ率上昇」

・特殊干涉「固有モンスター遭遇率上昇」

・特殊干涉「固有スキル獲得」

・特殊干涉「再度一度ドツペルゲンを殺した時反射ダメージ二倍または二分の一」

・特殊干涉「次の転職までステータスの大部分を見れなくなる」

第五話 別れは静かに（前書き）

なんか予測していた方向と百八十度ほどずれてしまった感じである。まあ一人で生活していれば好き勝手出来るから書きやすく……、なるといいなあ。

とりあえず旧ダンジョン物でいう強制転職の乱はこれにて終了。次回からは……、どうしようかな？

第五話 別れは静かに

裏切ったな僕の気持ちを裏切ったんだ皆皆裏切ったんだ！

はい、絶賛防衛中のフィーでございます。

現在情報戦を行っています。
変装中です。

見た目女の子になっています。

どこどこで自分を見たという情報をちらつと流してちよつと離れたところのを流してあのお兄ちゃん見つかったの？ って無垢な笑顔で聞いたりして疑われる要素をまず潰しました。

髪の毛を黒く染め同じ色の付け耳で半獣フィルドハーフに化けております。

いやあ、自分結構雑貨とか材料とかの供給元として活動してたもんだから二月も引き籠ってると怖いお姉さんもとい各店舗の仕入れ担当さんが血眼になって探しているわけで、いつの間にか自分が逃げ出した原因にされていた神殿の関係者も草の根わかるように探し回っているわけで。

いやね、出てきている事はどうやらおっちゃん教えてしまったようなのですよ。

しかも地下倉庫公開付きで。

隣の空き地を買わされたとボヤいているのを変装した姿でこっそり聞いていたから間違いない。

今はカツラも用意したし魔法で動く付け耳と尻尾を装備して女の子の服を着て軽く化粧をし裏声で女の子として振る舞っているのでおやつさんすら気づきませんとも。

正直困ったなあ。

見つかったら確実に大目玉食らうよね、うちが悪いわけじゃないのに。

なぜこうなった？
どうしてこうなった？

そもそもなんで指名手配されてるの？

意味が分からん。

しかもこの金額何さ、十万エクだと？ 日本円換算で一千万だぞ
おい！？

この世界の物価って安いんだぞ！ 馬鹿にするなよ一千万を！
何さ何さ、うちが一体何をしたって言うのさ！

いきなり自白剤嗅がせといて、しまいにはこれが。
もうなんかね、さすがに裏切られた気持ちでいっぱいですよ。

うちが悪いのか？
うちが悪かったんだらうか？

そんな事は無いはずだ、ノック無視したけど。
傷心の自分は引きこもっても問題ないはずだ、突入されたらしい

けど。
もう誰も信用できないかもしれない。

悪意は無くても情報は漏れるのだ、現代社会での生活経験のある
うちが言うのだから間違いない。

情報化社会なめるなよ！
顔と住所がネットにバレルだけである種の祭りが起きるほど祭り

好きなんだぞ！
なんか違うとはこの際言わせない。

それだけ情報は怖いのだ。
何処に隠れるべきか？ どう逃げ出すべきか？ どこに逃げるべ

きか？
簡単である。

何のためにあんなに苦勞して要塞を建設したと思ってるのさ。
極小さな要塞、極大きな防御力、補給は地下道からこっそりダン

ジョンへ。

なんだ、無敵じゃないか。

ファイフィルの技術はせかいちいいいいいい！

まあ異世界の職人様方が開発した技術なんだけどね。

森のもつと奥に日本家屋でも作ってまったり暮らそうかな？
で
きそつもないけど。

とりあえず偵察偵察つと。

なぬ。

どうした事だ。

神殿に、子供が、増えている、だと！？

うち用済み！？

今まで一度も使った事のない望遠鏡を引っ張り出して町の外壁の上から孤児院を観察していたら吹いてしまった。

無論壁と同じ汚れた白い色の布をかぶりカモフラージュしております。

さて、もっと良く調べよう。

……おや、なんか人が多し見た事もない顔がいっぱいいる
じゃないか。

外から傭兵でも呼び寄せたのか？

それにしても特に何も無いはずなのに怪我人が多いな。

何かあつたんだろうか？

……ん？ 今子供がうちの長屋に入らなかったか？

あそこって仮眠室って言っても対外的には孤児院だよな、そもそも
もなんで改築と増設がされたのか推測するべきか。

まあ考えるまでもないか。

あそこは孤児院で、子供が入って行って、かつ怪我人が多い。

どこかの村が山賊にでも潰されたか？

どちらかと言えばモンスターの襲撃の方を考えるべきか。

とにかくあいつらは孤児で怪我人はよそ者と考えた方がよさそう
だ。

確か薬はおやっさんに結構分けたのがあるはずだから足りてるは
ず。

なら単純に在庫が不足してきているから生産者つちを呼び戻したいの
か？

いやそれだけなら人伝に伝えればいいだけだ、生産なら関わらな
くてもできるからな。

推測だけじゃ現状がつかめない。

現状がわからないまま手遅れになったら目も当てられない。

しかたない、話を聞きに行くか。

とりあえず自宅だな。

撤収！

↓世界が激震し始めてからの巻↓

目指すのは商店の地下倉庫。

実は塞ぐときに、内側からなら門を外せば簡単に開けられるよう
にしておいたのさ！

何やらいろいろ商品が置いてあるところ見るとちゃんと倉庫とし
て使ってるみたいだな、関心関心。

これなら待つてれば降りてくるか。

さて、おっちゃんが降りてくるのを……、って奥さんが降りてき
た。

まあ奥さんでもいいか。

「ちよつとすみ」

「キヤア!？」

「すみませんよ。逸れニートのフィーでございます」

「あ、うん。こんなところでどうしたのかしら？ みんな探しているわよ？」

彼の奥さん、すごくかわいい声でした。
あのリア充め。

「なぜ自分が探されているのかと、今町で怒っていることをお聞きしたいのですがよろしいでしょうか？」

「そんなにかしこまらなくてもいいのに。えっとね、貴方を探しているのは薬が足りないからで」

やはりか。

「町は今大変な事になっているの。ダンジョンに成長の兆しが見られるみたいで地上のモンスターが凶暴化してて」

「村が一つ襲われ壊滅したと。ついでに村人は戦うより逃げる事を優先したから全員無事だと」

「え？ その通りなんだけど良く知ってるわね」

そりやなんとなく予測付けてましたから。

見た感じ重傷者はいなかったし、疲れている人はいても誰か死んだような感じはなかったからそうじゃないかと思っただ。

孤児もあんまり寂しがってないところを見るに孤児院は臨時の避難所になっているんだろう。

地下にいたから改築しているのに全然気づかなかったんだぜ！
まあすみません嘘です予想の斜め上でした。

「それで貴方に村を取り戻す事を依頼したかったみたいだけど貴方がちょうど雲隠れしちゃって皆困ってたの」

「そーなんですかー。うちが困ってる時にいきなり自白剤食らわせ

てくれる人たちが困ってるんですかー」

きつと今自分の笑顔は黒い笑顔に違いない。

「そうなのよー。もう町の住人からも秘蔵っ子を出せってせつつかれてるみたいで皆疲れ切ってるわ」

おっちゃんの奥さん、肝っ玉が太いというよりは天然だ。

ド天然だ、たぶん神殿への嫌味なの気づいてないだろうねこれは。そういう意味ではどこかすつとぼけたおっちゃんと似た者夫婦でお似合いなのだろう。

「ああ、じゃあこの滋養強壯薬わたし馬車馬の如くはたらくがいよって伝言してもらえますかね。ああこっちは旦那さんと使つて下さい」

「ありがと。皆もそろそろしつかり反省したところだから頃合いを見て許してあげてね」

「!?!」

なん、だと？

まさか気づかないふりは演技だったというのか！

この奥さん、できる!!!

「まあ気が向いたら。薬は今日中にここに持ってきますけど、告げ口は禁止だよ?」

「夫の恩人だもの、告げ口なんてしないわ。これからも仲良くしてあげてね」

できた奥さんだ。

なんてできた奥さんだ。

おやつさんにはもつたいない、本当にもつたいない！

うちも奥さん貰うならこんな夫を立てるしっかりした人がいいなあ。

「ではまた後で薬を持ってきますね。ここに置いておけばいいですかね？」

「そうしてくれると助かるわ、わざわざ女の子の恰好するぐらいなもの、まだ人前に出たくないんでしょ？」

「……あ」

忘れてました。

まあ体がまだ子供なんで女装してもほほえましいしカツラかぶれば完全に女の子に見えるから問題ないんだけどね。

「で、ではさようならー！」

ピューっと思が鳴るほどの速度で逃げ出した。

まあ、流石に恥ずかしいわけで、問題なくても恥ずかしい物は恥ずかしいのだ。

まあとりあえず現状はわかった。

薬はすぐにもっていったがやはり奥さんもおやつさんもいなかったところを見ると気を使ってもらったんだらう。

隠し通路を元に戻しつつ考える。

うちはどうしたらいいだらうか？

ぶっちゃけみんなが思っているほどうちは強くない。

ゲームで言うAGIすはやみ特化型なので魔物をバンバンぶっ殺してるように見えるだらうが、核を外れれば手数は普通の冒険者よりもはるかに多くならざるおえないのだ。

つまり、攻撃力弱い。

持っている武器も見ればわかると思う。

- ・精霊獣の角剣 丈夫さが取り柄で最上級初心者装備。
- ・十五代目スライム殺しの小槍 アイスピックの流用品です本当にありがたいとございました。
- ・投擲用毒短剣 毎回回収する採算度外視装備で毒の追加効果付き。
- ・自宅用ブラッティシザーズ 草刈り用の大鎌です、本当にありがとうございます。

全部初心者武器もとい低レベル武装です本当にありがたいとございました。
ちなみに最後のやつはもともと武器を草刈り鎌に改造したもので名前が痛いのだ。

文句は無駄に大きな刃をつけた武器の作成者に言ってくれ。
そもそも最後のは武器ですらねえよ！
まあ防具は死にたくないなので魔具がずらりずらりだけどね。

- ・幸運兎の耳(兜モドキ、ウサ耳へアバンドともいう・幸運効果)
ヴァルトラ
- ・抗魔銀の鉢金(鉢巻で額に当てる金属の防具・魔法ダメージ軽減効果)
はちがね

・幸運兎の尻尾(首飾り・幸運効果)

・祝福の法衣・改(防御魔法式を織り込み済み・致命的攻撃に対し

し一度のみ発動)

- ・魔法銀の鎖帷子(物理干渉型衝撃軽減効果)
ミスリル
くさりかたひら
- ・守護の手袋×2 両手のため二つ(上記と同様)
- ・守りの籠手×2 両手のため二つ(上記と同様)
- ・守護の腕輪×2 両手のため二つ(上記と同様)
- ・守護の足輪×2 両足のため二つ(上記と同様)
- ・風の草足袋靴下と同じ一セット(靴下モドキ・速度強化効果)
くさたひ
- ・瞬足の草踏靴と同じ一セット(この世界特有の草履モドキ・速

度強化効果)

正直ここまで装備してたら相手がとんでもない人外でもない限り殺されないと思うんだ。

ちなみに兎シリーズは効果が高い順に尻尾、耳、前足、後足だと言われている。

ただし、幸運値とも言えるものに対し最も効果が高い物が適応されるのがこの世界のシステムである。

まあ統計取って調べてみました、まあ二つだけだったので確実にやないが七割がたそうだろうと思っっている。

なお、鉢金は作成者にあやかって三尾の狐を彫り込んでいる。鎖帷子は見えないし法衣も見えない目にそれほどの違いは無い。

腕輪と足環は透明だし普段は鉢金を外しているのもそれほどおかしな姿には見えない、はず。

手袋も指が出るようになってるし籠手だって謎の肌色の金属なので目立たないはずである。

指輪系の魔具がごてごてしいから一切付けてないし、まだファツシヨンの域だと思っただけどやっぱり変かなあ？

草足袋と草踏は結構誰でも使ってるし、こつちの世界だと靴の方が少なかったりするよななぜか。

まあ全部歩きな関係上修繕しやすい物が流行った結果だろう。まあこんな装備なのでやたらめったら物理攻撃に強くなる種族

特性から魔法もあんまり効かないというチート装備である。結果、超機動要塞ファイイルが完成しているわけだ。

まあ、さすがにお風呂とかでは脱ぐがお風呂に持って入って洗うぐらい念入りにそばから離さないようにしている。

その関係上ウサ耳と服は結構ダメになるのが早いのが悩みだが、耳は結構ドロップするし服は買えばいいので問題ない。

まあ買わずに修繕して使っているが。草足袋と草踏は足が速くなる薬草を編んで作ったものを魔具化し

たら出来上がったものだ。

ただしこれが一番コストかかっていて、足が速くなる薬草一つ一つが高いせいか片方を一回取り換えるのに一千エク（約十万円）近くかかるので普段は普通のやつを使っている。

まあ材料も自分で調達しているので何の問題もないがやはりもったいない物はもったいない。

さて、気づいただろうか。

装備の効果の中に回復力増強は存在しないのだ。

つまりは元々瞬殺用の短期戦用装備なのである。

やはり攻撃力増強は急務である。

刀が欲しいなあ。

ちょっと無駄な話をしよう。

ダマスカスカスプリング刀のどちらにするか悩むが、どっちも特性があるからな。

ちなみに説明するとスプリング刀とは自動車で使われるリーフスプリングという板バネを刀の形にでっち上げたものである。

元がバネなので剛性と切れ味を維持しながら折れず曲がらず柔軟な刀身を作る事が出来るのである。

ただし刀の美しさがそれなりに失われており美術品としての刀とは別物の実戦刀となっている。

また材料の入手性から言ってもコストが安いため、それが一番の特徴とも言え使い捨てにできなくもないのが魅力と言えば魅力が。

西洋融合の鋼鉄木刀モドキとして作った場合凶悪な鈍器にもなるとだけ言っておく。

スプリング刀の特徴として質が悪いと予想以上にしなる、かつその際刃を痛めるため防御にはあまり向いていない。

また雑に扱っても刃は欠けるが元がバネなので結構壊れないという素人向きの刀と言える。

まあ一度曲がると元が工業用のバネなため人力ではほぼ確実に戻せず戻せたとしてもその部分の強度が著しく低下するため廃棄するしかないという弱点を持つ。

まさにうちのような素人向け使い捨て刀なのである。

十本ぐらい作ったがならしで速駄目にしたのはいい思い出である。だがあえて言おう、瞬天殺は男のロマンである。

逆にダマスカス刀とはダマスカス鉞、別名ウーツ鉞と呼ばれる多重三次元層構造を持つ合金で作られた刀の事で、樹木のような波紋を持ち美術品としても価値の高い刀である。

そして美術性に比例するかのように製造コストが恐ろしく高く材料の入手何度も最高である。（うちが製造した場合の話である）ただし現状の技術で製造できる刀としては最高のものがこれだ。

（現代技術がふんだんに使われているのでうちが最先端である）ダマスカス刀もスプリング刀と同じように剛性と柔軟性が同居した刀ではあるが一方からの圧力に対し弱いという特性がある。それはダマスカス特有の層構造をうちが作る際、材料の段階で技術力不足から二次元層構造で作るための技術上の問題で、層構造に對して平衡の圧力に弱い。

技術が拙いため金属同士の接着が甘く、酷い時は剥がれるのだ。

層構造を縦方向に向けて作り、縦方向から見た際の厚さで強度を補うため突きには向かなくなるのだ。

そのためダマスカス二次元構造刀は質が悪いと突きを行った時、剥がれるようなおかしな割れ方をする。

技量も低いくせに核を一突きにして破壊する関係上自分に向いていないと言えるだろう。

かと言って本来の三次元層は必要な技術レベルが高すぎて自分では製造できないしできたとしても適切な加工が無理と言わざる負えない。

材料をぶち込んで自然生成するダマスカス鉞は品質が不安定すぎるため再調達時に同質の刀を用意できないため断念したので存在し

ない。

三次元構造刀の可能性としては、いきなり刀の形で構造と金属配分を意識して作り刃の部分鍛え刃を付けるしかないわけで、もうその時点でムリゲーである。

たとえるなら有効射程三百メートルのマシンガンに弾一発の状態で一キロ先のリングに刺さった縫い針の穴を正確にねえ、と言われているのと同義である。

そしてそもそもダマスカス刀自体が玄人向きの刀で、この世界では刀術が存在しない以上作っても宝の持ち腐れになる可能性が非常に高い。

更に言えばダマスカス刀は二次元構造でも製造そのものが難しく、ダマスカス刀も扱いが非常に難しい金属であり、使い方を間違えるとゴミに成り下がるのも特徴の一つである。

最後だが、さすがのダマスカス刀も漫画のようにグニャグニャ曲がるほどの柔軟性はもっていない。

仮にあったとしてもそれは絶対魔法か何かファンタジーの力を借りているのである。

まあ両方共に生粋の平和ボケの国では触れる機会すらなかったのだから実際にはどうなのかまではわからないが、まあ知識の面から研究した結果だしほとんど間違っていないだろう。

ただし、ダマスカス刀はこちらで研究した結果が全てだ。

生前の世界ではそろそろ再現できたのかな？

まあ実戦刀として一番優秀なのはステンレス刀であるが……、あれは重さと切れ味がなあという話である。

ただしほぼ一切の手入れ不要というのはのどから手が出るほど欲しい効果ではあるが。

まあステンレス材質の板バネ材を用意すればいいのだが硬く脆くなるんだよなあ、まあそれで今度作ろう。

魔導鋳物はここいらのダンジョンじゃ生成されてないから刀一本分で国が帰るほどの値段になりそうだし無理だ。

まあ鋼材が一番奥深いがやはり元素の再配列加工で作る元素設計刀が最強だよなあ、材料の入手難度考えなければ。

材質の外から中央に向けて計画的変更と配置、それに加え原子配列そのものに干渉して原子配列レベルの三次元構造を持つ刀を作ればそれだけで斬鉄剣ができる。

まあ自力でその域に手をかけるのが神業を持つ職人なんだがうちの能力と技術では不可能である。

我が刀に切れぬものなし！ とか言ってみたい。

ちなみにだが、原子の再配列なんてできれば焼き入れや焼き戻しの状態すら再現できるのでそもそも鍛冶ではなく製造というなんとも味気ない物に成り下がる。

しかしそんな微細な配置換え技術なんて魔法でも見た事ねえよと言っ話。

そういえば何の話だったけか？

そうだ、今後の事だったけ。

まあ刀の材料はあるし後でって、また話がそれている。今問題なのはこれからどうするかである。

しかたない、うち自身も混乱してるみたいだし一度家に帰って寝てから考えよう。

く呼びかけられてからの巻く

目が覚めるとそこは生前の世界だった。

誰もいません。

恐怖。

そしてぱつと目が覚める。

はい、夢落ちです、分かってもああいうのは怖いですね。

ガクブルものです、誰か助けて！。

……しかし不思議だ。

あんな夢を見るほど心にダメージ受けてないはずだけどなあ。

何よりもこの世界でやってる物作りが楽しいし、別に提供する相手がいなくても一人で作ればいいんじゃないかなと思えるほどにはこの世界を気に入っている。

ホームシックではないから安心できる場所に帰りたかったのだらう。

まあ自宅は一人に馴れる場所だったからなあ。

今だから思うが、本とパソコン以外は何も無い部屋だなあと。

エロ本の一冊でもあればまだ可愛げがあったのかもしれないが、あったのは一昔前の小説やらレンタルしてきたDVDアニメぐらいである。後は知識欲を満たすためにネットが繋がった旧式PCぐらいだ。

さすがにDVDは借り物だったので愛着は無いが、他の物は本当に大切にしていた。

PCなんてわざわざ基盤のダメになった部品を交換して使っていたほどだ。

昔の基盤は集積率が低いので交換しやすかったってのもあるが。もちろん買い替えるお金がなかったというのもあるが。

でも少ないから、長く使ったからこそどれにも不思議と愛着があったしとても大事にしていた。

だからだろうか。

遺志を残され年を経た器物には意思が宿ると言われている。

いわゆるつくもがみ
所謂付喪神である。

なんとなく近くに感じる。

決して届かない、薄皮一枚の向こう側に。

これが哀愁なのかオカルトなのかは判断できないが、意思のようなものを感じた。

お前らは今を思い返せって言うのか？

確かに生前に比べたら生活は充実しているし現代知識のおかげで優越感にも浸れる。

周りのみんなの役にも立てるし一人で生活できるほどにもなった。仲直りしろつても言うのか？

確かに、一方的に引き籠ったのは事実だけど仲たがいなんてした覚えはない。

むしろ向こうが犯罪者みたいに賞金かけるなんてことをしたのだ。……生前合わせればすでに六十近く、大抵の相手に年上な自分が譲歩しろつて事か。

まあこの変な感じだけど核心みたいのに従って仲直り……、仲直りなのか？

たえ頼まれたつてもうあそこで生活はしないけどね。

とりあえず尋ねてみる事にしよう。

しかしどう会えばいいものか。
きつと今うちの歩く姿を見ればとぼとぼという擬音が恐ろしく似合う事だろう。

まあそんなこんなで神殿前まで来ました。

ああ、もちろん着替えてますよ？ ちゃんと男の子ですよ？

「おい大変だ！ 問題児が帰ってきたぞ！」

「問題児？」

「大神官を呼び出せ！ 神殿が崩壊する前に！！！」

「崩壊？」

「嗚呼、今度は何が壊れるんだ。水の次は火か？ 食べ物か！？」

「一体うちが何をした！」

切れてもいいよね、切れてもいいはず。

あれか、たぶんポンプが凍ってるのに無理して動かして壊したんだな。

もう帰ろう、きつと場違いだったんだ。

あれだね、オーバーテクノロジーを導入しすぎたんだね、便利だけど。

きつとあれに馴れてるくせに保全保守の概念が理解できなかったんだが、便利だけど。

管理できないやつは使う権利ないよな、便利だけど。

しかも壊したのが俺になってる件。

あれか、これがかの有名な「いじめカッコ悪い」ってやつか。

「帰ろう、帰って寝よう」

「ワーワーワー！ ちょっと待って、待って下さい！」

腰をがっしりつかまれた。

誰かと思えば猫神官さんではないか。

いや、子供で小っちゃいうちの腰に抱き着くとかほぼ寝そべらな
いといけないわけで飛び込んできたわけですか。

そして会話が途切れえる。

正直気まずい。

「離してもらえませんか？」

「あ、ごめんなさい」

「じゃあさよなら」

「だから待って下さい！」

まだ何か用事があるんだろうか？

いや、引き止められてるから有るのはわかってるんだけどね、こ
の状況つつかこんな状態で頼みごととか正気を疑うよ？

「何なのさ」

「……その、すみませんでした」

「何の事？」

「帰ってきて、もらえませんか？」

「嫌だよ、四六時中身の危険を感じるところで生活できるわけないだろ。しかもあの手配書は何さ？　うちいつから犯罪者になったの？」

「申し訳ありません、連絡の過程で行き違いがありました、いつの間にか捜索願が手配書に変わっていたのです」

間違いでしたすみませんでなんでも済ませられると思わないでほしい。

手配書って全世界の神殿で発行されるからもう自分どこ行っても犯罪者扱いですよ？

たとえそれが間違いだったとしても最早手遅れ、世間一般に「一千万円の元賞金首」として認識されるわけですよ。

一千万とかそれこそ邪神の復活とか世界の滅亡とか神殿への連続爆破テロ行為とかしないとかからないレベルの賞金ですよ？

可能な限り考えないようにしてたけどさ、いくら何でも酷いんじゃないかなるうか。

「何を言われようと戻る気はないからね、もちろんわかっているよね？」

「本当に申し訳ありませんでした。どうすれば許していただけるでしょうか」

「状況はわからんけどそうせざるおえなかったんだらうから、許す許さないで言えばすでに許してるよ。ただもう戻る気はないだけだよ」

「どつしても、だめですか」

あれだね、事ある事に自白剤モドキ嗅がせたり家に突入されちゃ気の休まる時がないよ。

流石に怖くて住み続けるとか無理でしょ。

「もう一度言いますがもう戻る気は欠片もありません。怖くてもう街中じゃすめないですよ。取り下げたって元賞金首なおは変わりませんしね」

「……その、全ての神殿で間違いだったむねを掲示してもらったのですが、ダメですか」

「余計勘ぐる人が出るだろうね。もしかしたら神殿の弱みを握ったんじゃないかって。そう言っいわれなき理由で狙われるわけですよ」
「本当に申し訳ありません」

いや、土下座されても困るだけなんです、なんでわからないんだろうね。

そもそも技術力で言えばこの世界の誰よりも広い知識があるわけで、それが全国的にばれば狙われるのはどうしようも必然なわけですよ。

今回の事でいろいろ調べられるだろうから勘のいい奴とかは察してしまっわけなのですよ？ わかれよ馬鹿共が。

なんかイライラしてきたな、本当に帰ってしまおうか。

あ、大神官が走ってきた。

相変わらず連絡が遅いなあ、連絡経路どうなってるんだろうか？

「戻ってきて、くれますね？」

「嫌です」

いきなりそれか。

「戻ってきて、くれますよね？」

「嫌です」

あれか、ループとかインフィニティなのか。

「住む所はどうするのですか？」

「すでに建てました」

トップだから軽々しく謝罪できないのはわかるけど、そんな泣きそうな顔されながら言われても困るんだけどな。

「生活は、どうするのですか？」

「ダンジョン潜ってればどうにでもなります」

「一人暮らしをすると税金も払わなければいけませんよ？」

「貯金があるので人頭税程度余裕です」

ちなみに税金はその人の職種によって変わる。

冒険者は人頭税、年齢に応じた税金を頭数に応じて払わなければならない。

これで大嫌いな中央政府にも顔を出さなければいけなくなったが、まあその程度は白霧使えば問題ない。

中央政府って処理がとにかく遅いんだよな。

もしかしたら連絡は行っても手配書の取り下げまだなんじゃないかろうか。

「どこに、住むのですか？」

「答えると思います？ 本気で？」

「病気なわけではなかったんですね」

「今までだって引き籠って研究した事の一度や二度あったでしょう」

「そうですね、出ていくんですね」

「ええ、出ていきます。今までお世話になりました」

「たまには、遊びに来て下さいね」

「転職時にはお世話になると思います、ではさようなら」

いや猫神官さん、口パクパクさせながらうちと大神官の顔を交互に見ても可愛くないですよ？

むしろ間抜けです。

もしかして大神官が引き止めるとでも思ったんだらうか？

神殿の弱点になりえる自分を？

ありえないのをなぜ気づかないんでしょうか。

一度教育しなおすべきだと思います。

そうしてうちは独り立ちしたのだった。

第五話 別れは静かに（後書き）

神殿の攻撃。

主人公は人付き合いに馴れていない、主人公の心に120のダメージ、効果は抜群だ。

主人公は勘違いをしている。

ミリィ夫人の攻撃。

主人公は優しさに馴れていない、主人公の心に80のダメージ、効果は抜群だ。

ミリィさんの高感度が20上がった。

主人公は刀好き（知識のみ）

刀は日本人の魂である。

今住んでいる地方は水脈が豊富で結構どこを掘っても水が出る。

代わりに雨が降ると鉄砲水が多く川が簡単に氾濫する。

また地層に砂の層が多い事も特徴と言えば特徴。

五話終了時点での主人公ステータス。

スキルでない自力での物作りは生産スキルには含まれません。

なお、祝福は無条件に詳細閲覧可能。

名称：ファイフィル・ファウ・フォリア 職名：ファイ

職業：職業訓練生

転職可能職業：商人「15」、調合師「15」、鍛冶師「15」、

術式使い「99」

LV・45/99 EXP・22・01% NEXT:85367

称号一覧

「@*者」\$級# : システム権限により詳細閲覧不可

「限界突破体现者」特級称号：システム権限により詳細閲覧不可
「先を歩む者」特級称号：システム権限により詳細閲覧不可

<<特殊技能一覧

>魔法：ステータス閲覧

・Lv.1 名前、職業、称号、本スキル詳細と技能一覧を閲覧可能

・Lv.2 状態、称号元、技能詳細、転職可能職業を閲覧可能

・Lv.3 レベル、現在経験値量、必要経験値量を閲覧可能

・Next-count 42350

>魔法：生命力回復補助

・Lv20 活力を回復可能、ただしカロリーを大幅に消費する。

効果一、一定時間生命力の上昇により傷の治りが早くなる。

効果二、一定時間気力などで動けなくなっても動けるようになる。

>魔法：肉体活性化

・Lv40 新陳代謝を向上させるがカロリーを大幅に消費する。

効果一、身体能力の上昇、傷を治す速度の上昇。

効果二、免疫力向上にともなう解毒速度の上昇。

>魔法：終わりの裁き

・Lv1 〓身及び一手の罪・重+によってダメージが変わる対魔法。

効果一、自身より相手の罪が重ければ二倍のダメージを与える。

効果二、自身が相手の罪より重ければ自身もダメージを受ける。

効果三、自身と相手の罪の重さが同じであれば三倍のダメージを与える。

<<祝福一覧

>長命種の宿命

>第一次限界突破者

>自分殺しの宿命

>呪い：シャドウハンド

・レベルアップ時ステータス追加上昇

・転職制限「基本職の転職不可」

- ・ 転職干涉「特殊職業解放」
- ・ 特殊干涉「肉体成長停止：十年」
- ・ 特殊干涉「レアドロップ率上昇」
- ・ 特殊干涉「固有モンスター遭遇率上昇」
- ・ 特殊干涉「固有スキル獲得」
- ・ 特殊干涉「再度一度ドツペルゲンガーを殺した時反射ダメージ二倍または二分の一」
- ・ 特殊干涉「次の転職までステータスの大部分を見れなくなる」

閑話 大神官の憂鬱（前書き）

閑話を書こうと思ったのだが、書き終わって思った。

ちよつと失敗したかもしれん。

まあこの世界の、彼以外から見ただけの側面が見えるかもしれない。

ちなみに誤字脱字チェックをしていない手抜きを行っているが許してほしい、眠いのだ。

閑話 大神官の憂鬱

The 大神官 side story

ある日、ちよつとした噂を聞いた。

思えばこれが始まりだったのかもしれない。

なんとこの町に浮浪者がいるらしい。

しかもそれは年端もいかないような子供で外壁による守りもない町の外で生活しているという眉唾物の話である。

正直そんな子供がいたら奇跡である。

それなりに体の出来た大人ならともかく年端もいかない子供なら角兎に殺されてしまうのが落ちである。

事実、毎年外へ遊びに行く子供から少なからず怪我人や死人が出るのだ。

とてつもない田舎でもない限りこの世界では子供は労働力として考えない。

そもそも子供を放り出す親がいるのだろうか？ 法律で罰せられるのに？

少し調べてみる事にしましょう。

本当に外で生活している子供がいるらしい。

しかもダンジョンに潜っているというのだ。

子供が？ 大人でも生死をかけなければ生きていけない世界に？

なんて笑えない冗談、そもそも十五歳になるまで上位職への転職は許可されない。

それは子供を労働力として使い潰さないための処置なのだがどうにかして上位職についた子供なのだろうか？

まさか未調査の神殿でも見つけたのだろうか？ しかし神官職の助

けがなければ本来転職はできないはずなのだ。調査するべきか否か、無理に聞き出すのは不味い気がするが神殿の管理は神官の務めである。飯に調査するとしても簡単に教えてくれるとは思えない。何せ上位職は下級、中級、上級とあるのだ。これ以上転職できなくなる愚を誰が侵すだろうか？やはり要調査には変わらない。

実際に調査して分かった事だが、この子供の生活は本当にギリギリだ。

なぜ生きていられるのかわからない。

食べ物ほとんど買っている形跡がない。

収入のほとんどは町の中で借りた倉庫の維持となぜか大工道具を買っているらしい。

まさか町の外に家を建てる気なのか？ 木製の建物では間違いなくモンスターに破壊されるだろう。

そうなると子供は巻き込まれて死んでしまうかもしれない。

それは不味い、神殿の威信にかかわる。

ここ百年近く使われていない孤児院制度を使う事にしよう。

審問官の彼女に言えば問題ない、彼女を呼んですべて任せた。

そういえば彼の親はいつたい誰なのだろう？

見た感じ純種の人類のように見えるのだが、それにしても大人びている。

長命種は里から出てくるわけがないし別の村がその子を残して壊滅でもしたのか？

いくら子供相手でも直接聞くのはマナー違反だ、どうしたものか。

それからしばらく経って報告が上がってきた。
どうやら彼女は手抜きを行ったらしい。

神殿の予算で建物でも立てるかと思えばあの孤児自身が拙い手つきで小屋を建てていた。

呼び出して叱ったのだが改める気な無いように見えた。

他の神官の知らせを受けてあわてて外に出ればあの孤児が今度は小屋を解体しているではないか。

まさか審問官がへまをして怒らせてしまったのだろうか？

保護者を選ぶ権利は孤児にあるため仮に出ていくのなら私たちに口を出す権利は無い。

困ったものだ、一応監視を付けておいた方がいいだろう。

そのすぐ後監視から報告が来てさらに驚いたが、どうやら気に入らなかつたので立て直しているらしい。

それなりの小屋が出来ていたと思うのだが何が気に入らなかつたのだろうか？

あれからしばらく、あの孤児は小屋を建てたり解体したりを繰り返しているらしい。

また小屋もだんだんと大きくなり部屋が増えているとか。

そもそもあの孤児は一体いつ休んでいるのだろうか？

さらに言えばどうやればこの短期間に建築技術を上げる事が出来るのだろうか。

あの孤児に対する疑問は尽きない。

そして神殿外でも彼は有名になり始めたらしい。

引き取ったのは失敗だっただろうか？

いやしかし引き取らなければ神殿の調和という意義を乱してしまう。
問題も、神殿の書類仕事も尽きないのだから困ったものだ。

私も一体いつ休めるのやら。
とにかく書類と格闘する日々だ。

孤児がまたわけのわからない事を始めたようだ。

今度は穴を掘っているらしい、それも相当深く。

もしかして気狂^{きちがい}いだから村から追い出された忌み子なのだろうか。

まあ引き取ってしまった以上今更追い出せないしまだ追い出す理由もないだろう。

周りに支障が出なければ好きにやらせておけばいい。

それからしばらくは報告もなく平和な日々だった。

どうやら井戸と言うものを作っていたらしい。

地面の下を流れる川を掘り当てたのが井戸だとか。

神官見習いの水汲み担当は相当感謝していたようだ。

そういえば彼は神殿側の建物に來ない、あの窓のないほったて小屋は暗いだろうに。

もしかして普段は別の場所にいるのだろうか？

念のために確認する必要があるだろう。

なぜこつも子供は問題ばかり起こすのか。

今でこそ成人したが息子が子供の衣相当苦労したからわかるが、子供の行動に予測を付けるのは難しい。

だが、それにもまして彼の行動に予測がつかない。

そしてふと気づく。

彼が来てから数年がたっているが、成長していない気がする。

少し聞いてみると彼は長命種なので成長が極端に遅いらしい。

確か長命種はその特性上精神の成長も遅いはずなのだが、

そんな簡単に情報を明かしてはいけないと注意するが何か不満なようだった。

確かに私から聞いたのだが、何故そんな事を聞くのか聞き返すぐらいするべきだ。

彼が頻繁に外出するようになった。

今までもそれなりに外出していたが、泊まり込みで外出する事は無かったのだが一体どうしたのだろうか？

少し調べさせるとどうやら鉾明種の鍛冶屋に弟子入りしているらしい。

最初は戸惑っていたらしく一度謝罪とあいさつに行こうかと思っていたが意外な報告が上がってきた。

彼もきつと孫ができたようで嬉しいのだろう、色々教え始めたらしい。

これならほつといても問題ないだろう。

しかし鍛冶屋に弟子入りなどして何を作るつもりなのだろうか？

もしかして釘を自分で作るつもりなのかもしれない。

彼は大工にでもなりたいのだろうか？

聞く所によると自分の部屋だけでなく、神殿関係者用に残りの部屋を仮眠室として開放するというのだ。

正直そこまでされる理由がわからないが、便利なので今度私も利用しようと思う。

しかし色々な事に手を出しすぎたと思う。

聞く所によると商人のまねごともしているらしい。

そのせいで前住んでいたところを追い出されたんじゃないだろうか？しかし子供をとても大事にする長命種が村から追い出すはずがない。

まさか逃げ出してきた？でもそれだと何から？

やはり、彼の事はわからないことだらけだ。

また彼が騒ぎを起こしたらしい。

今度はガラスをどこからか持ってきたようだ。

自分で作ったという話らしいがガラスの製法は製造ギルドの秘伝である、子供が知っているわけがない。

呼び出して叱ったが逆にガラスの製法を説かれてしまった。

実際に作ったのだろう、王族が使うような鏡を作ったのだから。

なんでこうも問題になる事ばかりするのだろうか？

しかもそれが害だけでなく益ももたらしているのだから頭が痛い、これでは頭ごなしにやめさせる事もできない。

そして、彼の家には窓ガラスがつく事になった。

各仮眠室にも窓ガラスがついた。

利用中かどうかこれで確かめやすくなったのだが、正直こんなほったて小屋にガラス窓とか場違いすぎて寒気がする。

見る人が見れば貧乏人の家に見えるだろうし、窓を見れば逆に貴族の道楽に見えるだろう。

この子供は本当に何がしたいのだろうか？

神殿だから放置されているが町で同じ事をしたら間違いなく帰属に睨まれるだろう。

もしかしたら彼個人は危険人物として注目されているかもしれない。一応忠告しておくべきだろうか？

また彼だ。

今度は自分で作った井戸を塞いでしまったんだとか。

凝り性なのだろうか？ 何もどこまでも完ぺきを求める事は無いだろうに。

またすぐ報告が上がってきた。

どうやら不思議な道具で水をくみ上げられるようにしたらしい。

しかも水道なる道具で、くみ上げた水を必要な分だけ使える装置を作ったらしい。

なんでこう彼の話題が尽きないのだろうか。

まあ、いつも苦勞させられているんだ、便利だから神殿側にも作らせよう。

更に報告が上がってきた。

シャワーなる行水を行うための施設を作ったらしい。

こんな街中で行水を行えば、男性はともかく女性は覗かれ放題だろうに、子供だからこそ分からなかったのだろうか？

詳しく読んでいくとそこいらの事は配慮されているようだ。

今までにない不透明のガラスを作り光を取り入れているのだとか。

屋根にも油を塗って登れないようにしたとの事だが、そこまでするという事はそれなりにわかっているんだろうか？

ませていると言わざる負えない。

また報告が上がってきた。

しかし今回は彼ではなく彼の担当にした尋問官からの報告書だった。

彼が作った小屋の用具室を尋問用を使用する旨が書かれていた。

彼の許可もとつたらしいがこの頃本当に好き勝手している。

まあそれぐらいでない彼の監視なんてやってられないのだろう。

簡易倉庫の予定だと聞いたが問題ないのだろうか？

まあ私が気にする事ではないので放置する事にしよう。

なんとも手のかかる孫ができたような感覚が嫌すぎる。

主よ、これは何かの試練なのでしょうか？

可能なら平和な日々を返して下さい。

待ちの見回りをしている神官から報告が上がってきた。
どうやら彼がまた噂になっていているらしい。

聞く所によるとダンジョン内で特定の魔獣をとんでもない速度で狩
つて回っているとか。

まあ誰かの迷惑にはなっていないようなので問題ないといえば問題
ないだろう。

そういえばこの頃とても安くプニョ粉が出回るようになってる。

誰かがため込んだものを放出でもしたのだろうか？

あれはお肌にいらいらしいので私も少し買ってこよう。

なんだかこの頃ダンジョンの出土品が安くなってきている気がする
が、この町の冒険者が増えた報告は無い。

冒険者が減っていくのはいつもの事だが、定住している冒険者が移
住を考えているのだろうか？

そうなるのと正直出土品が高くなるので困るのだが、神殿に呼びかけ
て冒険初心者を回してもらおうべきだろうか？

事件が起きた。

私自身も目撃している。

まるで誰かを祝福するように神殿のシンボルが光ったのだ。

調べて回るとこの町に駆け出し勇者が来ているらしい。

ダンジョンの出土品が安くなったのもそのせいだろう。

という事は安くなっているのは一時的なものなので今のうちに買い
込むのが賢いか。

しかし安物買いの銭失いと言う言葉もあるので安易な買いだめは失
敗の元だろう。

まあ、今回彼がかかわっていないか調べるよう尋問官には言ってお

こう。

そういえば彼が血だらけで戻ってきたらしい。

急いで医者を手配したが、どうやらダンジョンに潜ったらしい。

危険なので一応注意しておくが、たぶんこれで懲りただろう。

彼が図書館に通っているらしい。

初心者指南書を読んでいるとか。

この前のあれで懲りなかったのだろうか？

まあ冒険者が増えるのは歓迎なので今のうちに予備知識を試させておくのもいいだろう。

それよりも問題は今の頃処理しなければいけない書類が増えた。

傾向を見る限りダンジョンの活性化が近いうち、ここ四五年中に始まりそうなのだ。

これは神殿ネットワークを通じて冒険者を回してもらうべきだろうか？

一つ聞き慣れない報告書が上がってきていた。

彼は薬を調合する知識があるらしい。

どうやらかなりの量の薬と材料をため込んでいるとの事。

どうやら自分の部屋の半分は倉庫として使っているようだ。

今更判明したのは近所の子供を使って薬の調合を手伝わせていたからだとか。

なぜ今まで気づかなかったのか問い詰めたが、どうやら彼のせいらしい。

彼は自分の部屋に他人が入る事に対してかなりの拒絶反応を起こすらしい。

なので外から除く程度しかできず、何か作っていても子供の事だからと気づかなかつたらしいのだ。

まあ私が監視していたとしても気づかなかつただろう。

何せ薬の調査は普通薬師と呼ばれる専門の集団が自らの秘伝を用いて調査を行い作り出すからだ。

どうやら図書館に恐ろしく難しい専門書を置いて適性のあるものを見極めているらしいが、どうやら彼はそれを丸々理解してしまったらしい。

正直本当に何をするかわからない子供だ。

もう勘弁してほしいと思う。

また彼が活発に動き出した。

今度は鍛冶屋と商店の主を巻き込んで何かを作っているらしい。出来上がったのは平たく大きな箱状のもので行水を行うための部屋に設置するらしい。

壁を壊して神官に白い目で見られていたが気にしていないようだ。

確かにあそこが使えない間川に行水に行くか布で拭うしかないので面倒と言えば面倒だ。

そしてお風呂なるものを彼が設置し終わった。

どうやら王族や貴族が行う湯につかる行為をもっと小規模にして個人で行えるようにする施設らしい。

後から後から上がってくる報告書によるとすごく気持ちよく健康にも配慮された施設で美容にもいいらしい。

神殿外から使用者も増えるほど盛況らしいのだが裸で長時間いるため覗こうとする馬鹿が増えたようだ。

やはり除きはできないようになっていっているらしいが。

ただ燃料費がかなりかかるようで一人で払うには少々ためらう者らしく、数人でまとまって入るようになったようだ。

そして彼がダンジョンに潜ったという報告を最後に二三日彼に対する報告が途絶えた。
死んでしまったかと心配したがもっと大変な事が起こったのだ。

大変な事件が起こった。

神殿全体が活性化したのだ。

通常、誰かの転職時に勇者の祝福事件同様シンボルが活性化する事があるが神殿全体が活性化する事はまずない。

そもそも神殿の活性化具合は魔物の凶暴化を示す一つの目安なので非常に大きな混乱が起きた。

それこそ世界が終わると泣き叫ぶものが出たほどだ。

ダンジョンの活性化も近いのにこれではかなり面倒な事になると言わざる負えない。

困ったものだ。

とりあえず処理しなければいけない書類が五倍に増えた。

原因の調査を命令するが延々と調査は進まない。

まさに原因不明である。

神殿は活性化したままで夜でも明るく眠らない神殿と言われるほどに明るい。

仮眠室利用者が急激に増え原因究明に皆走り回っている。

幸いモンスター活性化現象は起こっておらず魔獣はいつものようにそれなりのおとなしさを見せている。

しかし、なぜ神殿が活性化しっぱなしなのかは気になるところだ。

正直夕方近くでも書類の処理ができるのが嬉しくもあるが、それ以上に書類が増えるのがいただけでない。

ここ二日はある程度落ち着いてきて神の祝福として扱われているようだ。

しかしまだ油断はできない。

問題ばかり作る彼が帰還していない。

それは、今後大きな問題に発展する可能性が多大だと言えるだろう。

神殿が活性化してから一週間ほどが経った。

また問題が発生した。

急に神殿の活性化が終わったのだ。

なぜこの神殿ばかりと思わないでもない。

そして、それと時を同じくして彼が帰還した。

間違いない、彼が事の原因である。

尋問官に彼から事情を聞き出すべくかの尋問室に呼び出すよう命じた。

さらに誰が気を利かせたつもりかは知らないが、自白剤系の香が焚かれていた。

神官には基本的に精神干渉系の薬剤は効かないので問題ないが彼はそれをモロに吸ってしまったらしくすぐに消したが無駄だったようだ。

まあこの件は後で謝罪すれば問題ないだろう。

そして聞き出した事柄で周囲が騒然とした。

何せ、彼はすでにダンジョン攻略を終わらせていたのだ。

そればかりではなく彼は一人でダンジョンを攻略していた。

大抵の冒険者は危険なのでそのような無謀を行わないのに彼はそれすら知らずに潜っていたのだ。

しかもそれも一回二回ではなく数えきれないほど潜っているらしい。しかも今回最大警戒対象であるシャドウに遭遇したばかりかそれを死亡せずに撃破し見た事もない神殿に転送されたらしい。

しかも驚くことに彼は初期転職すら行っていなかった。

そう、初期職業である初心者だったのだ。

その状態でダンジョンに潜るなど狂気の沙汰である。

なぜ誰も彼に忠告しなかったのだろうか？

そもそも職業訓練生にすらなっていない彼がなぜダンジョンに潜れたのか不思議だ。

普通はその状態で潜れば浅い階層でならともかく深い階層ともなると確実に殺される。

現在は何で職業訓練生に強制転職せよとらしく、たぶんシャドウの呪いも解除されているのだろう。

聞くべきことはもう聞いたので、とりあえず今回の尋問はこのぐらいいにしておこう。

報告が上がってきた。

彼が部屋から一切出てこなくなったらしい。

窓もふさがれて中の様子を見る事も出来ない。

なぜ、などとは考えるまでもなく昨日のあれだろう。

なにせ、ダンジョンから命からがら帰ってきたらいきなり真っ暗な部屋に放り込まれ自白剤を嗅がされたのだから。

私でも人間不信になる。

さて、どうしたものか。

教主や神官の中には彼を息子や弟として見ている者がかなりいる。

ここで放置しようものなら問題になるのは確実だろう。

とりあえずそれとなく気にするように通達を出す。

尋問官が乗り込もうとしたようだ。が門前払いを食らったらしい。

なぜか、ドアが開かない。

木でできているはずのそれは不思議なほどの強度をもって審問官を拒絶したらしい。

必死に開けようと頑張ったようだ。が、あの部屋は報告書によると内鍵である。

内側からしか開けられないし閉められない、そういうカギだ。

最早でてくるまで待つしかない。

本日の報告書が届く。

あれから一週間、一切出てきていないそうだ。

少々心配だが、水道の水も補給しているし食料もそれなりにため込んでいるようなので死んではいないはずである。

町は平和なものである。

あれから事件と言う事件は起きていない。

ただ、経済が活性化しているようで商人の出入りが増えているようだ。

この町は元々目立つ生産物があまりないので田舎なのだがそれなりに人口が増え始めているようだ。

もっと発展してくれば補佐官が置けるようになるので仕事が楽になるのだが。

まあ今はそんな事を考えている暇はない。

あれからさらに一週間ほどたった。

審問官が突入しようとして失敗した旨の報告書があがっている。

彼の人間不信をこれ以上悪化させるつもりなのだろうか？

呼び出してしっかりと叱っておいた。

ただ、彼女をもってしても破れない木製の扉はいったいどんな木を使えばいいのか見当もつかない。

一体どんな仕掛けになっているのだろうか？

それからさらに一週間ほどがたった。

彼は小屋から出てこない。

そろそろ不味いかもしれない。

透視の魔法を使って確認したが、何か薬を作っているようだった。

まだ大丈夫なのだろう。

後々必要になると忠告があったので、彼の仮眠室を改装し大きなものに現在改築している。

彼に一切の確認を取っていないが、一切返事をしてくれないので仕方ない。

彼は一ヶ月もかけて何を調査しているのだろうか？

そして薬師ギルドが彼を出せとせつついてくる。

何をいまさらと言う話であるが神殿が隠していたことになっているらしい。

突っぱねているがそろそろうるさくなってきた。

さらに十日が立ち、それでも彼は出てこない。

これで一ヶ月出てきていない。

本当に心配だ。

それ以上に彼への問い合わせの多さに驚く。

商人から鍛冶屋、飯屋に服屋、ありとあらゆる商売人から彼に連絡を付けるとせつつかかれている。

彼の人間関係は一体どれだけ広いのだろうか？

貴族からも問い合わせが入っている。

保護者なので連絡が取れませんとはいえず、とりあえず風邪で寝込んでいる事になっている。

まあそれもここ二三日の話でそろそろ別の理由を用意しなければならぬ。

そして貴族から風邪薬が届いたのにも驚いた。

基本的に高慢な貴族が一般市民であり孤児でもある彼に風邪薬を届けたのだ。

それこそ雇用主が使用人に頭を下げるぐらいありえない事である。

さらに十日がたった。

信じられない事だが彼はかなりの量の出土品を各店舗に卸していたらしい。

なんでも自分は仕入れ業者であると言って注文を取り必要なアイテムをダンジョンから必要なだけ引き上げてくるんだとか。

後、安くするからと言って在庫を持たせ急な注文にも対応できるようにしたりと色々頑張っているらしい。

そして、そろそろ各店舗ともに在庫の数が少なくなり注文を受けずらくなってきたているらしい。

何せ材料が入ってこないのだ、彼らが焦るのもわからないでもない。そして、彼の反応は無い。

さらに十日がたった。

彼の反応は無い。

各店舗へは冒険者を雇って材料の供給をしている。

やはり集団でしかアイテムを収集しない冒険者に頼むと割高になってしまつらしく彼への問い合わせは終わらない。

そろそろどうにかしなければならぬ。

しかしどうしたものか。

尋問官を呼んでどうにか彼を連れ出してくれと頼んだ。

そしてさらに大問題が発生した。

待ちが一つ潰れたのだ。

ダンジョンの活性化が起きていたのは三日ほど前に告知を受けていたが油断した。
犠牲者こそいないものの彼の立てた孤児院がなければみな露頭に迷っていた事だろう。

現在は仮宿舎として機能している。

そしてその住人達からも彼に村を取り返してほしいという依頼が舞い込んでいる。

彼は知らないうちにとてつもなく大きな信頼を気づいていたようである。

子供だと思つて我々は大きな失敗をしまつていたらしい。

あれから十日が立ち、結果として尋問官は攻城兵器を持ち出した。
極太パイルバンカーこと城壁崩しである。

本来ならば絶対に許可しないがもう対外的にどうしても彼を出すほかなく非常手段だ。

どうやら扉に不思議な石が張り付き強度を上げていたようで真っ白な何かが砕けた後が残っていた。

そして結論から言えばもぬけの殻だった。

何もない。

それが部屋の中に突入した結論である。

調べると隠し扉が見つかった。

どうやって家具まで運び出したのか知らないがもう彼はここにはいないのだ。

しかし、ずっと彼を心配してた人たちが見張りに立っていたはずなのにどうやって出て行ったのだろうか？

隠し扉の先も彼がやっとこさ出れるぐらいなので荷物を持ち出す事、ましてやばれずに出ていくなんて不可能だ。

とりあえずこの事を公開するほかない。

保護者としての面目は丸つぶれである。
事情を話し、搜索願を出す事にした。
驚いた事に各店舗から少なくとも搜索費用が寄付された。
その額五万エク。
さらに貴族から五万エクが追加され十万エクの資金を投じてなされた搜索願が出された。
出されたはずだった。

あの日からさらに九日後。
驚くべき情報が提供された。

搜索願として出したはずのそれは金額のせいか手違いにより手配書として出されてしまっていた。

そして実は彼、すでに一部の活動を再開していたらしくミノタウンの店主が経営する雑貨店に顔を出していたらしい。

彼が知る前に訂正できればよかったのだが今からではもはや遅い、何もしないよりはと訂正願いと各神殿での事情説明をお願いした。

翌日、彼が訪ねてきた。

何を話したのかはあまり覚えていない。

私がほぼ無意識に作った報告書によると彼は一人立ちし、神殿の生活を終わらせたというような事が書いてあった。

彼への連絡は雑貨店の店主につければ伝わるだろうとも書いていたのでそれをそのまま公表した。

これでこの神殿へ子供を預ける人はいなくなるだろう。

神殿は安全という暗黙の了解は破られてしまった。

そして私は……、寂しいのだろうか。

何か家族を失った時のような空虚さが胸を潰している。

なぜ、こんなことになったのでしょうか。

閑話 大神官の憂鬱（後書き）

なお、閑話では直接物語に係わるような重大な事を書く気がありません。

代わりに日常的なものや主人公以外の視点で書くことと思っています。リクエストがあればメールでどうぞ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0565w/>

[練習作]ダンジョン物

2011年11月8日03時03分発行